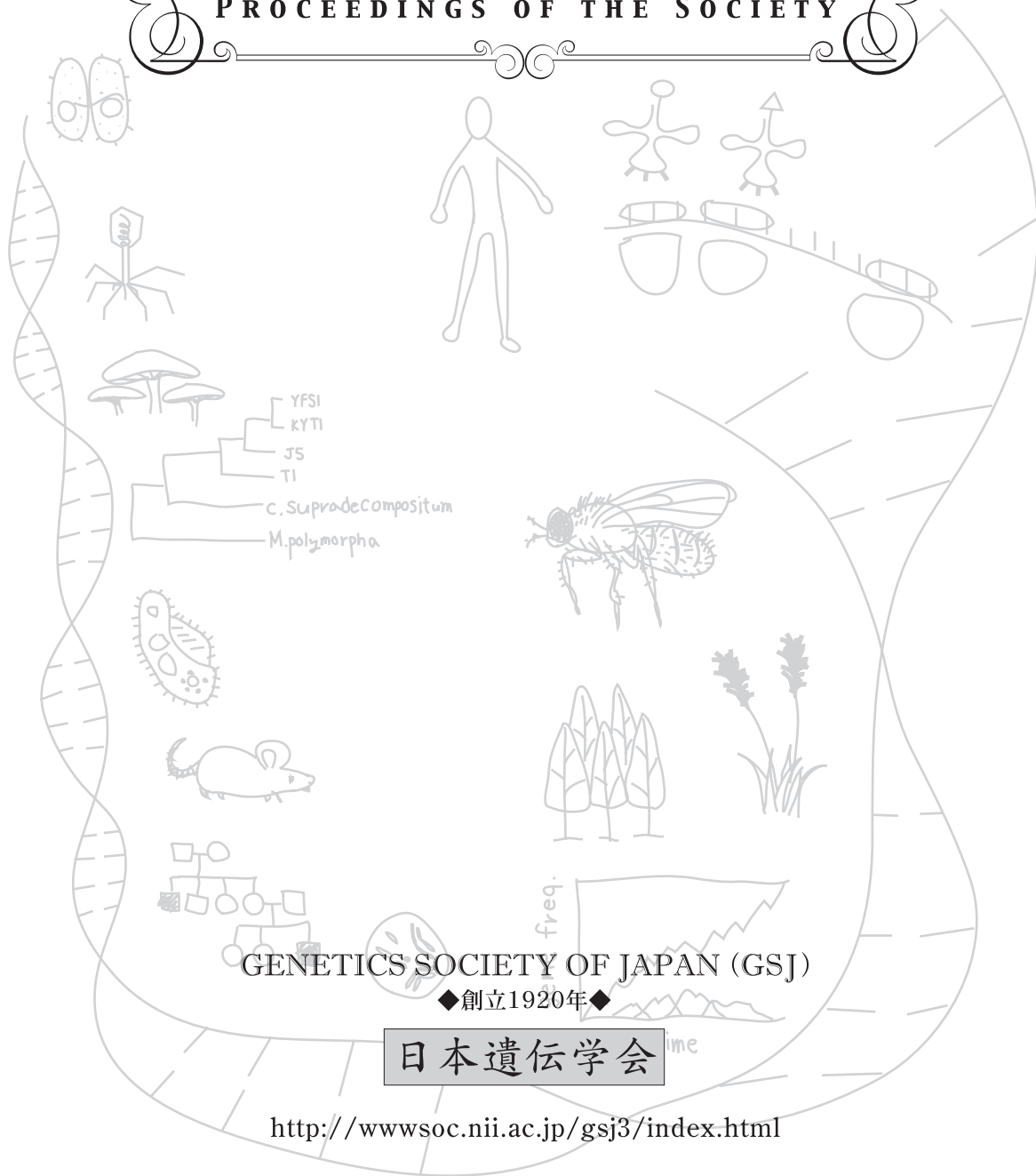


SUPPLEMENT TO GENES GENET.SYST.(2012)87(4) August 2012

GSJ

コミュニケーションズ

PROCEEDINGS OF THE SOCIETY

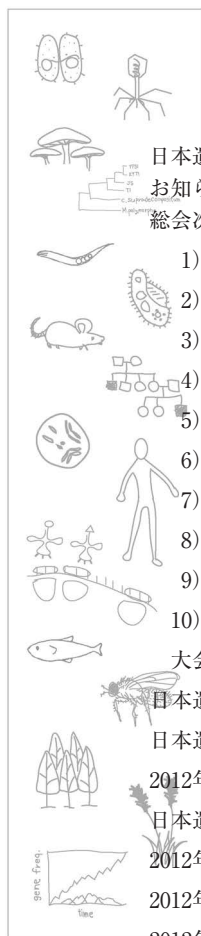


GENETICS SOCIETY OF JAPAN (GSJ)

◆創立1920年◆

日本遺伝学会 inc

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/gsj3/index.html>



目 次 頁

日本遺伝学会第85回大会のご案内	3
お知らせ：松本邦弘会員，持田記念学術賞受賞	3
総会次第	4
1) 会員数	4
2) 2012年度役員名簿	5
3) 2011年度決算報告書（単年度）	5
4) 2012年度中間報告（2012年6月30日現在）	6
5) 2013年度予算案	7
6) 2012年度日本遺伝学会木原賞・奨励賞	7
7) 協力委員会	7
8) 学会推薦学術賞・研究助成の年間スケジュール	8
9) 2013・2014年度会長・評議員選挙結果	9
10) 開催地一覧	10
大会・懇親会の模様	11
日本遺伝学会第84回大会 収支報告書	13
日本遺伝学会第84回大会を終えて 中別府雄作	13
2012年度日本遺伝学会第1回評議員会議事録	14
日本遺伝学会第84回大会総会議事録	16
2012年度日本遺伝学会編集委員・編集顧問合同会議議事概要	17
2012年度日本遺伝学会木原賞候補者推薦書	19
2012年度日本遺伝学会奨励賞候補者推薦書	21
2012年度日本遺伝学会名誉会員候補者推薦書	26

● 本 会 記 事

会員異動	31
山田科学振興財団2013年度研究援助候補推薦について	8
「エピジェネティクスの制御と生命機能」研究領域 成果報告会	30

日本遺伝学会 第85回大会のご案内

日 時	2013年 9 月19日(木)~21日(土)
場 所	慶應大学日吉キャンパス
大会委員長	岡田 典弘 (東京工業大学 教授)
大会副委員長	荻原 保成 (横浜市立大学 木原生物学研究所 教授)

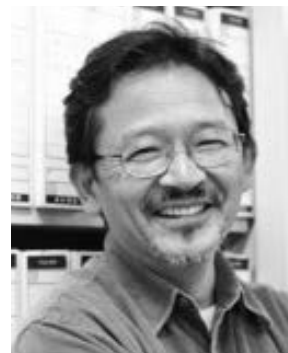
皆様のご参加をスタッフ一同、心よりお待ちしております。

お知らせ

松本 邦弘会員 (名古屋大学大学院理学研究科 生命理学専攻) が
第29回 (平成24年度) 持田記念学術賞を
受賞されました。

研究テーマの題名

『炎症・癌化などの生体応答を制御する
シグナル伝達機構の解明』



日本遺伝学会第84回大会総会

日 時 2012年9月25日(火) 15時10分～16時10分

場 所 九州大学医学部 百年講堂・大ホール

総会次第

1	大会委員長挨拶	委員長	中別府雄作
2	日本遺伝学会会長挨拶並びに報告	会長	五條堀 孝
3	報告		
a	幹事報告	国内庶務幹事 渉外庶務幹事 会計幹事 編集幹事 企画・集会幹事 将来計画幹事 男女共同参画推進担当 広報担当, ホームページ編集 遺伝学普及・教育担当 その他	小林 武彦 岩崎 博史 真木 寿治 舘田 英典 遠藤 俊徳 山本 博章 松浦 悦子 関根 靖彦 池村 淑道
b	学術会議から	学術会議連携会員	五條堀 孝
c	学会賞選考委員会報告	委員長	五條堀 孝
d	選挙管理委員会報告	委員長	小出 剛
e	生物科学学会連合報告	委員	岩崎 博史
f	その他 (2013/2014年度日本遺伝学会会長挨拶)		
4	議事		
a	2011年度決算	会計幹事 会計監査	真木 寿治 深川 竜郎
b	2013年度予算案	会計幹事	真木 寿治
c	第86回大会について	企画・集会幹事	遠藤 俊徳
d	国内名誉会員の推薦について	会長	五條堀 孝
e	その他		
5	次期(第85回)大会委員長挨拶	第85回大会委員長	岡田 典弘
	日本遺伝学会木原賞・奨励賞授与式	会長	五條堀 孝

1) 会員数 (2012年8月31日現在)

普通会員	829名 (内学生会員 190名)
外国会員	8名
機関会員	46件
賛助会員	3件
名誉会員	国内 16名 外国 11名
計	913名

2) 2012年度役員名簿

会 長	五條堀 孝				
評議員					
全国区	荒木 弘之	郷 通子	権藤 洋一	印南 秀樹	角谷 徹仁
	小林 一三	松田 洋一	岡田 典弘	佐々木裕之	颯田 葉子
北海道地区	黒岩 麻里	鈴木 仁			
東北地区	石川 隆二	渡辺 正夫			
関東地区	深海 (小林) 薫	松本 幸次			
東京地区	平野 博之	米田 好文			
中部地区	倉田 のり	村井 耕二			
関西地区	宮田 隆	那須田周平			
中国・四国地区	村田 稔	富永 晃			
九州地区	大野みずき	佐渡 敬			
幹 事					
国内庶務幹事	小林 武彦				
渉外庶務幹事	岩崎 博史				
会計幹事	真木 寿治				
編集幹事	舘田 英典				
企画・集会幹事	遠藤 俊徳				
将来計画幹事	山本 博章				
男女共同参画推進担当	松浦 悦子				
広報担当, ホームページ編集	関根 靖彦				
遺伝学普及・教育担当	池村 淑道				
会計監査	深川 竜郎	田中 秀逸			
第84回大会委員長	中別府雄作				

学会賞選考委員会 (2012)

委員長	五條堀 孝			
委員	平野 博之	米田 好文 (木原賞のみ)	岡田 典弘 (木原賞のみ)	
	堀田 凱樹	森 郁恵	高畑 尚之	

研究助成金等推薦調査委員会 (2012)

委員長	五條堀 孝				
委員	郷 通子	平野 博之	印南 秀樹	角谷 徹仁	小林 一三
	米田 好文	倉田 のり	岡田 典弘	佐々木裕之	颯田 葉子

3) 2011年度決算報告書 (単年度)

A 収 入		B 支 出	
摘 要	(単位 円)	摘 要	(単位 円)
1 学 会 費	7,605,000	1 事 業 費	5,816,827
2 賛助会費	120,000	雑誌製作費	4,689,196
3 科学研究費補助金	1,600,000	大会補助費	235,327
4 事業収入	3,762,209	遺伝学談話会補助費	0
雑誌売上	1,300,000	大会学生旅費補助	636,000
別刷売上	2,461,465	協力委員会分担金	256,304
利 息	744	2 評議委員会/幹事会費	1,266,952
5 木原基金	400,000	3 事 務 費	1,729,879
6 雑 収 入	83,404	雑誌発送費	419,244
小 計	13,570,613	封筒代	220,500
総 計	13,570,613	編集経費	362,553
		事務所経費	727,582
		4 学会賞関係費	729,625
		5 選挙関係費	0
		6 謝 金	1,271,270
		小 計	10,814,553
		7 予 備 費	2,756,060
		総 計	13,570,613

4) 2012年度中間報告 (2012年6月30日現在)

摘 要	(A) 予 算	(B) 1月～6月 収入額	(C) 7月～12月 収入見込額	(B + C) 収入見込額
1 学 会 費	7,500	4,798	2,702	7,500
2 賛助会費	80	0	120	120
3 科学研究費助成金	1,600	0	1,500	1,500
4 事業収入	3,905	2,215	1,690	3,905
雑誌売上	1,300	864	436	1,300
別刷売上	2,600	1,351	1,249	2,600
利 息	5	0	5	5
5 木原基金	200	0	200	200
6 雑 収 入	55	10	45	55
小 計	13,340	7,023	6,257	13,280
総 計	13,340	7,023	6,257	13,280

摘 要	(A) 予 算	(B) 1月～6月 支出額	(C) 7月～12月 支出見込額	(B + C) 支出見込額
1 事業費	8,500	2,921	5,579	8,500
雑誌製作費	6,000	2,921	3,079	6,000
大会補助費	1,000	0	1,000	1,000
遺伝学談話会補助費	300	0	300	300
大会学生旅費補助費	800	0	800	800
協力委員会分担金	400		400	400
2 評議委員会／幹事会費	500	224	276	500
3 事務費	2,390	1,207	1,123	2,330
雑誌発送費	560	247	313	560
封筒代	230	0	230	230
編集経費	500	220	230	450
事務所経費	1,100	740	350	1,090
4 学会賞関係費	550	20	530	550
5 選挙関係費	0	0	0	0
6 謝 金	1,400	631	769	1,400
小 計	13,340	5,003	8,277	13,280
総 計	13,340	5,003	8,277	13,280

5) 2013年度予算案

A 収入の部		(単位千円)
摘 要	予 算	
1 学 会 費	7,600	
2 賛助会費	120	
3 科学研究費補助金	1,500	
4 事業収入	3,901	
雑誌売上	1,300	
別刷売上	2,600	
利 息	1	
5 木原基金	200	
6 雑 収 入	80	
小 計	13,401	
総 計	13,401	

B 支出の部		(単位千円)
摘 要	予 算	
1 事 業 費	8,370	
雑誌製作費	6,000	
大会補助費	1,000	
遺伝学談話会補助費	300	
大会学生旅費補助	800	
協力委員会分担金	270	
2 評議委員会/幹事会費	900	
3 事 務 費	2,181	
雑誌発送費	560	
封筒代	221	
編集経費	400	
事務所経費	1,000	
4 学会賞関係費	550	
5 選挙関係費	0	
6 謝 金	1,400	
小 計	13,401	
総 計	13,401	

6) 2012年度日本遺伝学会木原賞・奨励賞

- 日本遺伝学会木原賞 佐々木裕之（九州大学生体防御医学研究所）会員
「哺乳類のゲノム刷り込みのエピジェネティック制御機構の研究」
- 日本遺伝学会奨励賞 一柳 健司（九州大学生体防御医学研究所）会員
「レトロトランスポソンの転移機構および宿主との相互作用に関する研究」
- 日本遺伝学会奨励賞 高橋 文（首都大学東京 大学院理工学研究科）会員
「ショウジョウバエにおける進化遺伝学研究」

7) 協力委員会

- 同位元素協会委員 蓮沼 仰嗣
- 自然史学会連合委員 館野 義男
- 生物科学学会連合委員 岩崎 博史

8) 学会推薦学術賞・研究助成の年間スケジュール

件名	助成団体名	締切
猿橋賞	女性科学者に明るい未来をの会	2012年11月30日(金)
東レ科学技術賞・研究助成	(財)東レ科学振興会	2012年10月10日(水)
木原記念財団学術賞	(財)木原記念横浜生命科学振興財団	2012年9月30日(日)
内藤記念科学振興賞	内藤記念科学振興財団	2012年10月1日(月)
内藤記念海外学者招へい助成	内藤記念科学振興財団	前期 2012年6月1日(金)
		後期 2012年10月1日(月)
井上学術賞	井上科学財団	2012年9月20日(木)
井上研究奨励賞	井上科学財団	2012年9月20日(木)
井上リサーチアワード	井上科学財団	2012年7月31日(火)
研究調査助成	(財)日本証券奨学財団	2012年6月29日(金)
持田記念学術賞	(財)持田記念医学薬学振興財団	2012年7月31日(火)
研究助成金	(財)持田記念医学薬学振興財団	2012年6月15日(金)
留学補助金	(財)持田記念医学薬学振興財団	2012年6月15日(金)
基礎科学研究助成	(財)住友財団	2012年6月29日(金)
環境研究助成	(財)住友財団	2012年6月29日(金)
山崎貞一賞	材料科学技術振興財団	2012年4月30日(月)
研究助成金	(財)山田科学振興財団	2012年2月29日(水)
藤原賞	(財)藤原科学財団	2012年1月31日(火)
沖縄研究奨励賞	(財)沖縄協会	2012年9月30日(日)
朝日賞	朝日新聞社	2012年8月31日(金)

各種助成金の募集

学会の推薦を必要とする場合は学会内で選考のため財団の提出締めきりより、通常は1ヶ月早く締め切る。尚、各助成金の詳細については事務局までお問い合わせ下さい。

山田科学振興財団2013年度研究援助候補推薦について

山田科学振興財団より2013年度研究援助候補の推薦依頼がとどいております。推薦を希望される方は研究援助候補推薦要項・推薦用紙を以下のホームページアドレスよりダウンロードし、下記の提出書類1と2を2013年1月末(学会内で選考のため財団の提出締めきりより、通常は1ヶ月早く締めきる)までに学会事務局宛にご送付ください。

(下線部はお間違えのないようにご注意くださいようお願いいたします)

【提出書類】

1. 推薦書1部、関連主要研究論文リスト(A4版大)2部、別刷論文(1~3種)各2部
 2. 調査委員へ調査依頼のため1.の書類の写し11部
 3. 1の書類(別刷論文を含む)のPDFファイルを電子媒体にコピーしたもの
- * (電子ファイルは直接山田科学振興財団へお送りください)

【注意事項】

- ・財団締切 2013年2月28日
 - ・提出書類3は申請者が直接山田科学振興財団へ送付する
- 詳細は以下のHPをご確認ください。
<http://www.yamadazaidan.jp/>

9) 2013・2014年度会長・評議員選挙結果

会 長 遠藤 隆

次 点 城石 俊彦

評議委員

全 国 区	定数10名					
	五條堀 孝	角谷 徹仁	小林 武彦	権藤 洋一	松田 洋一	
	岩崎 博史	印南 秀樹	真木 寿治	平野 博之	小林 一三	
次 点	田村浩一郎	松浦 悦子	中別府雄作	佐々木裕之	倉田 のり	

北海道地区	定数 2 名
	鈴木 仁 金澤 章
次 点	峯田 克彦

東北地区	定数 2 名
	山元 大輔 山本 歩
次 点	柏木 明子

関東地区	定数 2 名
	荻原 保成 澤村 京一
次 点	伊藤 剛

東京地区	定数 2 名
	田村浩一郎 高橋 文
次 点	菱田 卓

中部地区	定数 2 名
	深川 竜郎 斎藤 成也
次 点	倉田 のり

関西地区	定数 2 名
	那須田周平 高野 敏行
次 点	池村 淑道

中国・四国地区	定数 2 名
	村田 稔 和多田正義
次 点	沓掛 和弘

九州地区	定数 2 名
	中別府雄作 佐渡 敬
次 点	佐々木裕之

日本遺伝学会選挙管理委員会

小出 剛 (委員長) 菱田 卓 筒井 康博

	有権者数	投票者数	投票率 (%)
会 長	785	199	25.4
評議員全国区	785	189	24.1

10) 開催地一覧

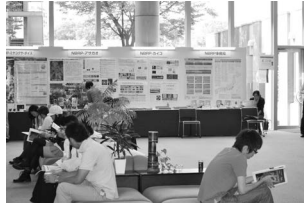
回	年	月	日	会 場	回	年	月	日	会 場
1	1928(昭3)	10	19	九州帝国大学農学部	44	1972(昭47)	10	7～9	岡山大学理学部・法文学部
2	1929(昭4)	7	26	北海道帝国大学農学部	45	1973(昭48)	10	14～16	名古屋大学農学部
3	1930(昭5)	10	31	東京農事試験場	46	1974(昭49)	9	10～12	福祉会館(仙台)
4	1931(昭6)	10	31	京都帝国大学・楽友会館	47	1975(昭50)	10	3～5	日本大学三島校舎
5	1932(昭7)	10	14	名古屋医科大学	48	1976(昭51)	10	28～30	日本生命中之島研究所(大阪)
6	1933(昭8)	10	26	広島文理科大学 動物学教室	49	1977(昭52)	9	28～30	北海道経済センター(札幌)
7	1934(昭9)	12	21	台北帝国大学 生物学教室	50	1978(昭53)	10	8～10	東京農業大学
8	1935(昭10)	10	21	金沢医科大学 法医学教室	51	1979(昭54)	10	11～13	京都大学農学部
9	1936(昭11)	10	16	岡山医科大学 生理学教室	52	1980(昭55)	10	6～8	富山大学教養部
10	1937(昭12)	7	31	北海道帝国大学理学部	53	1981(昭56)	10	12～14	広島大学総合科学部
11	1938(昭13)	10	13～15	九州帝国大学農学部・医学部・九州小麦試験地	54	1982(昭57)	11	19～21	九州大学医学部
12	1939(昭14)	10	14～15	科学博物館(東京)	55	1983(昭58)	10	8～10	東北大学教養部
13	1940(昭15)	8	27～28	京城帝国大学医学部	56	1984(昭59)	11	23～25	日本大学国際関係学部
14	1941(昭16)	地方談話会大会 (6会場)		(総会予定地は仙台)	57	1985(昭60)	10	13～15	神戸大学農学部・理学部・自然科学系
15	1942(昭17)	10	27～28	東北帝国大学 農学研究所	58	1986(昭61)	12	4～7	名古屋観光ホテル
16	1943(昭18)	10	20～21	京都帝国大学・楽友会館	59	1987(昭62)	10	29～30	筑波大学生物科学系
17	1944(昭19)	地方談話会大会 (7会場)		(総会予定地は名古屋)	60	1988(昭63)	10	8～10	京都大学農学部
18	1946(昭21)	11	18～19	静岡高等学校	61	1989(平元)	10	13～15	北海道大学学術交流会館
19	1947(昭22)	10	21～22	松本高等学校	62	1990(平2)	10	4～6	お茶の水女子大学
20	1948(昭23)	10	23～24	高野山	63	1991(平3)	10	16～18	九州大学箱崎キャンパス
21	1949(昭24)	10	20～22	名古屋大学理学部	64	1992(平4)	10	22～24	仙台国際センター
22	1950(昭25)	10	14～16	東京大学医学部	65	1993(平5)	9	17～19	日本大学国際関係学部
23	1951(昭26)	10	11～12	広島大学教養部	66	1994(平6)	10	8～10	大阪大学医学部講義棟
24	1952(昭27)	10	8～10	新潟大学医学部	67	1995(平7)	10	12～14	岡山大学一般教育講義
25	1953(昭28)	11	7～8	国立遺伝学研究所	68	1996(平8)	10	3～5	名古屋・椋山女学園大学
26	1954(昭29)	10	28～30	京都大学医学部	69	1997(平9)	11	1～3	横浜市立大学瀬戸キャンパス
27	1955(昭30)	10	16～18	岡山大学	70	1998(平10)	9	23～25	北海道大学学術交流会館
28	1956(昭31)	10	6～8	富山市公会堂	71	1999(平11)	9	24～26	広島大学理学部・法学部・経済学部
29	1957(昭32)	9	3～5	北海道大学農学部	72	2000(平12)	11	3～5	京都大学農学部・京都公会館会議場
30	1958(昭33)	10	16～19	名古屋大学医学部	73	2001(平13)	9	22～24	お茶の水女子大学
31	1959(昭34)	11	4～7	大阪大学医学部	74	2002(平14)	10	1～3	九州大学箱崎キャンパス
32	1960(昭35)	10月30日～ 11月1日		九州大学工学部	75	2003(平15)	9	24～26	東北大学川内キャンパス
33	1961(昭36)	9	1～3	東北大学川内分校	76	2004(平16)	9	27～29	大阪大学コンベンションホール
34	1962(昭37)	10	17～18	日本大学文理学部三島校舎	77	2005(平17)	9	27～29	国立オリンピック記念青少年総合センター(東京)
35	1963(昭38)	10	8～10	東京大学教養学部	78	2006(平18)	9	25～27	つくば国際会議場
36	1964(昭39)	10	18～20	愛媛大学	79	2007(平19)	9	19～21	岡山大学
37	1965(昭40)	10	18～20	京都大学医学部・楽友会館	80	2008(平20)	9	3～5	名古屋大学
38	1966(昭41)	8	10～12	北海道大学教養部	81	2009(平21)	9	16～18	信州大学
39	1967(昭42)	10	9～11	神戸大学教養部	82	2010(平22)	9	20～22	北海道大学高等教育機能開発総合センター
40	1968(昭43)	10	7～9	広島大学教養部・政経学部	83	2011(平23)	9	20～22	京都大学農学部・農学研究科(吉田キャンパス北部構内)
41	1969(昭44)	10	10～12	金沢大学工学部	84	2012(平24)	9	24～26	九州大学医学部百年講堂・同窓会館
42	1970(昭45)	10	5～7	東京女子大学短期大学部					
43	1971(昭46)	10	20～22	九州大学理学部・農学部					

●●● 福岡大会の様子 ●●●

近日中に大会紹介ビデオが学会 HP 上にアップされます。



九州大学医学部



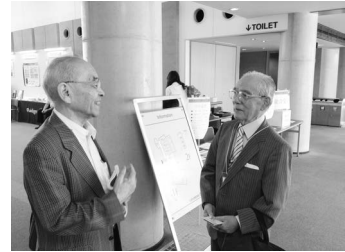
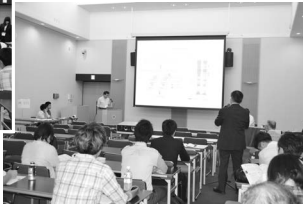
ロビーの様子



コーヒーサービス



一般講演の様子



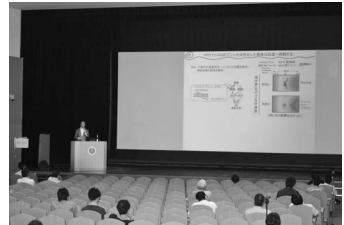
森脇和郎名誉会員（左） 坂口文吾名誉会員（右）



国際セッションの様子



男女共同参画ランチョン WS



プレナリーWSの様子



総会
熊丸副議長（左） 片山議長（右）



総会 会長報告



公開シンポジウムの様子



奨励賞を受賞された高橋 文会員（左）と
一柳健司会員（右）



木原賞受賞式
佐々木裕之会員



奨励賞授賞式 一柳健司会員



奨励賞受賞講演 高橋 文会員



木原賞受賞講演 佐々木裕之会員

●●● 懇 親 会 ●●●



中別府大会委員長の挨拶



五條堀会長の挨拶



関口大会顧問の挨拶



矢原大会副委員長の挨拶



木原賞受賞の
佐々木会員より挨拶



五條堀会長（左）
中別府大会委員長（右）



懇親会の様子

《分野別懇談会》



エピジェネティック・染色体



行動



植物



分子



集団進化



日本遺伝学会第84回大会 収支報告書

収 入 の 部			支 出 の 部	
1. 参加費		1,692,000	1. 会議準備費	1,768,750
事前 一般会員	161名 × @ 7,000	1,127,000	1) プログラム・予稿集 印刷・製作費	945,000
事前 学生会員	93名 × @ 0	0	2) 参加登録処理費(変更取りまとめ・入金処理)	73,710
事前 非会員一般	3名 × @ 9,000	27,000	3) 印刷, 制作費(大会・公開市民ポスター, 参加証など)	428,250
事前 非会員学生	4名 × @ 0	0	4) ホームページ作成費	50,000
	(261名)		5) 通信・運搬関係費(ポスター発送費及び要旨集発送費)	169,940
当日 一般会員	31名 × @ 8,000	248,000	6) その他(参加証ホルダー・角印費)	33,600
当日 学生会員	12名 × @ 0	0	7) 公開市民講座要旨集作成費(150部)	21,000
当日 非会員一般	29名 × @ 10,000	290,000	8) 公開市民告知 駅へのポスター掲示	47,250
当日 非会員学生	82名 × @ 0	0	2. 会議当日費	4,879,931
	(154名)		1) 会場費(付帯設備利用含む)	63,360
2. 懇親会費		1,003,000	2) 展示会場設営費	577,500
事前 一般会員	107名 × @ 6,000	642,000	3) 映像機材, オペレーター費	997,500
事前 学生会員	41名 × @ 3,000	123,000	4) 看板/表示作成費, 設置費	110,250
事前 非会員一般	2名 × @ 6,000	12,000	5) 運営人件費・諸経費	1,281,000
事前 非会員学生	1名 × @ 3,000	3,000	6) 会場備品費	28,483
	(151名)		7) 懇親会費	1,180,000
当日 一般	25名 × @ 7,000	175,000	8) コーヒー 一式	120,000
当日 学生	12名 × @ 4,000	48,000	9) ランチョンセミナーお弁当代	210,000
	(37名)		10) 公開市民講座関連	311,838
3. 要旨集広告掲載料 表紙2・3・4 6頁		714,000	3. 業務委託費	582,750
4. ランチョン収入		210,000	1) 展示会/広告 ランチョン事務委託費	246,750
5. ランチョンお弁当代		210,000	2) 運営 事務委託費	336,000
6. 展示会出展料(使用電力費含む)		1,543,500	4. 荷物運搬費	36,750
7. プログラム・予稿集	0部 × @ 3,000	19,000	5. 振込手数料	5,040
	19部 × @ 1,000		6. 予備費	518,279
8. 補助金, その他		2,400,000		
日本遺伝学会 補助金		1,000,000		
公開市民講座 補助金		1,400,000		
合 計		7,791,500	合 計	7,791,500

日本遺伝学会第84回大会を終えて

平成24年度の日本遺伝学会大会は、去る9月24日から26日までの3日間、九州大学医学部百年講堂と同窓会館を会場として開催されました。本大会では、国際枠として英語での講演16演題を含む一般講演(160演題)の他、シンポジウム3件(16演題)、ワークショップ15件(男女共同参画・プレナリーワークショップを含む)(84演題)を含め、合計260演題が全て口頭講演で行われました。大会参加者は476名で、その内、当日参加者は152名でした。

今大会では初めての試みとして、一般講演の国際枠を始め2つのシンポジウム(S1, S3)と1つのワークショップ(W514: Plant genetics in Asia)を英語で開催しましたが、多くの会員の皆様のご協力で質疑応答も盛り上がりがあったようです。多くの留学生が今後の日本遺伝学会大会に参加されるきっかけになればと願っています。

本大会も第83回の京都大会に倣い、学生は会員・非会員ともに参加を無料にしました。その結果、82名の非会員学生の当日参加がありました。開催地域の学生に興味のある講演を自由に聴講できる機会を提供することは、日本遺伝学会の普及活動として大変有意義なものであると思われます。なお、3つのシンポジウムは公開で行いましたが、公開シンポジウムのみに参加された方も8名(大会参加者には含めず)ありました。懇親会には250名を超える参加者があり、盛大に行うことができたと思います。また、今大会では、大会初日の夜に分野別懇談会が企画されましたが、夜遅くまで会員の交流が続いたようです。大会の運営は、これまでと同じ企画会社に依頼しました。また、前大会に引き続き参加登録・演題登録システムを利用いたしました。このため大会組織委員の事前・当日の手間は大幅に軽減されましたが、英語での対応が今後の課題です。

大会初日の9月24日の夕方には、百年講堂で公開市民講座を開催いたしました。講演内容は、「健康と21世紀の遺伝学・ゲノム科学」ということで、かなりの一般市民の参加がありました。質疑応答も盛り上がり、参加者の皆さんに興味を持っていただけたように思います。今回は、福岡市の後援を得て福岡市のホームページで案内をお願いするとともに、地下鉄駅や市民センターにポスターを掲示し、さらにポスターを九州地区の高校に送付しました。当日の会場には福岡市内や久留米市内から教員に引率された20名近い高校生の参加も見られ、それなりの広報効果があったようです。今回は、遺伝学会会員の皆様にも多数参加いただきました。10月末までに、学会大会と公開市民講座の決算及び報告も完了し、一段落いたしました。この場をお借りして、遺伝学会からのご援助と大会組織委員の皆様のご支援・ご協力に厚く御礼申し上げます。

大会委員長 中別府雄作

2012年度日本遺伝学会第1回評議員会議事録

日 時：2012年9月23日（日） 14時40分～16時40分

場 所：九州大学医学部 百年講堂 会議室

出席者：（会 長）五條堀孝

（幹 事）真木寿治，小林武彦，岩崎博史，池村淑道，遠藤俊徳，松浦悦子，館田英典，榎屋啓志（順不同，敬称略）

（大会委員長）中別府雄作（敬称略）

（評議員）権藤洋一，小林一三，佐々木裕之，颯田葉子，松本幸次，高野敏行，那須田周平，大野みずき，佐渡 敬，角谷徹仁，岡田典弘，平野博之（順不同，敬称略）

1. 会長挨拶（五條堀）

2. 大会委員長挨拶（中別府）

第84回大会準備状況（会場の準備についての詳細，一般講演，WS，シンポジウムの演題数，展示・ランチョンセミナー数，事前参加登録者数の報告がなされた。また，今回の準備にあたっての問題点があげられ，次期大会に向けての改善項目として今後ラフラと検討することにした。

3. 報告

3.1 会長（五條堀）

第83回大会以降の物故会員はなしと報告された。

休眠状態のIGFが活動を再会する兆しが少しあるが，遺伝学会としてはもう少し様子を見守ることとした。また第84回大会については，アジア遺伝学会設立第2弾の「アジアの植物遺伝学」・学生企画「Contemporary Evolution」，これに加えて2つの一般公演の国際セッションと，英語だけの講演セッションを増やし，特にアジアを照準とした国際化を目指した大会になっていることが報告された。さらに新しい企画として，幹事全員の寄付金に加えて石和貞男前会長の大型寄付をいただいて，分野別に若手を中心とした交流会を実施することが報告された。

最後に品川前会長からの引き継ぎ事項として副会長制については，もう少し議論が必要なため，来期の役員会へ引き継ぎをお願いすることとした。

3.2 国内庶務幹事（小林）

以下のシンポジウム等の後援，協賛の報告がなされた。

- 「第49回アイソトープ・放射線研究発表会7/9-11」
- 「第62回東レ科学講演会」
- 「平成24年度女子中高生夏の学校2012科学・技術のたまごたちへ」
- 「第7回女子中高生のための関西科学塾」へ支援金5万円

学術賞・研究助成の結果報告がなされた。結果は以下の通り。

- 文部科学大臣表彰科学技術賞（研究部門）小林武彦
- 2011年度東レ科学振興財団研究援助 久原 篤（甲南大学）1,500万円

その他育志賞，東レ助成1件，井上学術賞，木原学術賞，山田財団2件不採択，2013・2014年度会長，評議員選挙実施の報告がなされた。

3.3 渉外庶務幹事報告（岩崎）

生物科学学会連合の活動状況として生科連案内パンフレット2012の発行，会費を3万から5万へ値上げすることの承認，および次期代表選挙に遺伝学会から堀田凱樹会員を推薦したことが報告された。

遺伝学談話会を12月に東京にて開催する準備を進めていると報告がなされた。

3.4 会計幹事報告（真木）

2011年度の収支報告，2012年度の中間報告，特別事業基金についての報告がなされた。特別事業基金からの特別支出として，大会参加登録・演題登録システム，電子化投票システム，遺伝学用語集編集委員会からの支出およびアジア遺伝学コンソーシアムのための支出について報告がなされた。また，木原賞基金の賞金の残高があと2回分となるため，特別事業基金の満期の定期を解約して木原賞基金にまわすことが了承された。会員数の報告では1,000名を割っていることより，今後会員の減少に歯止めをかける対策について意見が求められた。

会費が未納の場合の退会，再入会についての意見交換が行われた。1年未納であっても退会とはせず，3年で自動退会の手続きをする従来の手続きについて早急に整備することとした。また今後学生会員の会費見直し，会費および投稿料支払い等のクレジットカード導入を検討することとした。

3.5 編集幹事（館田）

GGs の編集および発行状況、GGs 論文賞選考経過、新規投稿システムへの移行について報告がなされた。また今年から「学術定期刊物」の募集が停止されるため、代わりに「国際情報発信強化 A」に応募する（詳細は編集委員会議事録を参照）。

3.6 企画集会幹事（遠藤）

第84回大会 BP 賞投票についての協力をお願いした。また第85回大会は大会委員長を岡田典弘先生（東工大）として横浜市立大学の荻原先生のグループに協力を要請して開催する方向で準備を進めていること、日程および開催場所は現在検討中であることが岩崎会員より報告された。

また第86回大会開催地として長浜バイオ大学（大会委員長 池村淑道会員）が候補地としてあげられ、了承された。

3.7 将来計画幹事（山本）

法人化については今後の社会情勢を見守りながら、対応について検討していくこととした。

遺伝学用語集編集委員会の活動として、8/31に遺伝研にて第2回遺伝学用語集編集委員会を開催し、WEBにての登録について榊屋会員より報告がなされた。今後の予定として解説を入力し、年内に出版社を決める予定であることが報告された。

3.8 男女共同参画推進担当幹事（松浦）

2012年度会員の動向（会員の男女比、年代別男女比）、大会演題登録時でのウェブアンケートの実施、九州大会でのランチョン WS を九州大学男女共同参画推進室と共催することについて報告がなされた。今大会では大会参加のための支援に1件の応募があったと報告がなされた。その他として「女子中高中生のための関西科学塾への支援」、「女子中高中生夏の学校2012」への参加、および第10回男女共同参画学協会連絡会シンポジウムへの参加（10/7 東京慈恵医大にて）について報告がなされた。

3.9 広報担当幹事（小林代理）

HP のトップページのリニューアルおよび GSJ コミュニケーションズのアーカイブ化等を実施したことが報告された。また、英語 HP の充実のために今後実施する改良についての報告がなされた。

3.10 遺伝学普及・教育担当幹事（池村）

女子中高中生夏の学校2012参加報告がなされた。

3.11 日本学術会議報告（五條堀）

遺伝学分科会では遺伝教育について、高校生物学教育について、大学院生のキャリアパスの問題について今後対応をしていくことが報告された。

3.12 2012年度日本遺伝学会賞選考委員会報告（五條堀）

7月12日に学士会館にて開催された学会賞選考委員会について次のとおり報告がなされた。木原賞3件 奨励賞2件の応募があり、審議の結果、次の会員を授賞者とした。

木原賞：佐々木裕之会員

奨励賞：一柳健司会員、高橋 文会員

4. 協議事項

- 2011年度決算および2013年度予算案は会計幹事報告の際に、審議され了承された。
- 第86回大会開催地は企画集会幹事報告の際に、審議され了承された。国内名誉会員候補者として堀田凱樹元会長および宮田隆会員を推薦することが了承された。
- 電子化投票選挙において、今まで投票用紙にて実施された選挙のおぼえがきを下記のように訂正するように提案され了承された。

会長および評議員選挙に関するおぼえがき（平成17年9月26日改正）(6) の「投票締め切りの2週間前に普通会員であるものは、会長および評議員に対する選挙権を有する。」を「公示日の2週間前に普通会員であるものは、会長および評議員に対する選挙権を有する。」に改正。）

以上

日本遺伝学会第84回大会総会議事録

日 時 2012年9月25日(火) 15時10分～16時10分
場 所 九州大学医学部 百年講堂・大ホール
出席者 五條堀会長, 幹事他90名

1. 議長選出

議長に片山 勉会員(九州大学薬学研究院), 熊丸敏博会員(九州大学大学院農学研究院)が選出された。

2. 中別府大会委員長挨拶

3. 五條堀日本遺伝学会会長挨拶

4. 報告事項(評議員会議事録参照)

小林庶務幹事から, 大会の紹介ビデオ撮影への協力の要請があった。

5. 議 事

① 2011年度会計決算について

真木会計幹事から総会資料にもとづき説明がなされた。また, 深川竜男会計監査から, 6月13日に田中秀逸会計監査とともに国立遺伝学研究所にて会計監査を実施した結果, 2011年度の会計は適正に行われている旨の報告があり, それぞれ承認された。

② 2013年度予算案について

真木会計幹事から, 総会資料にもとづき説明があり, 予算通り承認された。

③ 第86回大会について

遠藤企画集會幹事から, 第86回大会が評議員会において関西地区で開催することが認められている旨の報告がなされ, 同地区での開催が承認された。

④ 名誉会員の推薦

五條堀会長から, 国内名誉会員に堀田凱樹会員, 宮田 隆会員を推薦したい旨の報告があり, 了承された。

⑤ その他

小林庶務幹事から, 会長および評議員選挙に関するおぼえがき(平成17年9月26日改正)(6)の「投票締め切りの2週間前に普通会員であるものは, 会長および評議員に対する選挙権を有する.」を「公示日の2週間前に普通会員であるものは, 会長および評議員に対する選挙権を有する.」に改正したい旨の報告がなされ承認された。

6. 次期大会委員長挨拶

岡田典弘次期大会委員長から, 関東地区にて第85回大会を開催する準備を進めている旨の挨拶があった。(その後2013年9月19日(木)～21日(土)に慶應大学日吉キャンパスにて開催することが決まった。)

日本遺伝学会木原賞・奨励賞授与式記録

総会終了後, 今年度の木原賞受賞者(佐々木裕之会員)および奨励賞受賞者(一柳健司会員, 高橋 文会員)に五條堀孝会長からそれぞれ賞状と副賞が授与された。授賞式終了後に木原賞, 奨励賞受賞講演が行われた。

2012年度日本遺伝学会編集委員・編集顧問合同会議議事概要

開催日時：2012年9月23日（月）16時50分～18時50分

会議場所：九州大学医学部百年講堂2階

出席者：岩崎，松浦，中別府，颯田，澤村，館田，田嶋，寺地，五條堀，平野，伊藤，森脇，米田，村井，高橋，田中，真木，西原（敬称略）

議 題

1. GGS PRIZE について

颯田委員より候補3論文が選ばれた経緯及び各論文の内容の説明があった。審議の結果次の2編を GGS prize 2012として決定した。

- (1) Yuhei Chadani et al. (2011) trans-translation-mediated tight regulation of the expression of the alternative ribosome-rescue factor ArfA in Escherichia coli. GGS 86: 151-163.

Arguments supporting this decision were: This paper provided evidence supporting the existence of a novel system for avoiding accumulation of stalled ribosomes when the mRNA does not possess a stop codon. The novel system proposed here is quite interesting and the logic in the text is easy to follow and to understand for non-specialists in this field.

- (2) Yongsu Jeong & Oh S (2010) Identification of an evolutionarily conserved, functional noncoding element regulated by Six1 homeoprotein. GGS 85: 233-240.

Arguments supporting this decision were: This study found a novel conserved non-coding regulatory sequence, SRE1, to which a homeobox protein Six1 binds. This sequence regulates expression of target genes of Six1 in cranial and spinal ganglia in mouse embryos. The sequence is well conserved from mouse to fish. Experiments and analyses from both molecular and evolutionary viewpoints are integrated to show clearly and comprehensively how this regulatory system works.

2. Review（総説）の扱い

以下の提案が審議され承認された。

[提案]

review は invited review のみとし，取りまとめは Reviews Editor が行う。下に有るように，仲介する editor から Reviews Editor への紹介の後，Reviews Editor から invite のメールを送る。岩崎編集委員を Review Editor とする。

3. GGS のフォーマット

Author Instruction に関する WG（田嶋 WG 長，平野・中別府委員）より提案が有り，審議の結果以下のよう

- (1) Short communication の長さを 8 印刷ページ以内とする。
- (2) 本文中のヘッダーについては現在の方式を明文化する。
- (3) ヒトを材料とする実験や動物実験の扱い，材料・データ等の提供に関する規定を明文化する。
- (4) supplementary materials のフォーマットについても明記する。
- (5) conflict of interest について記述する。

また journal scope の書き換えも含めた GGS の方向性を検討するために，WG（真木，平野，中別府委員）を設置した。

報告・協議事項

1. 論文発行状況

Volume 86

号	掲載論文数	Review	Full	Short	Other
1	8	1	6	1	0
2	8	1	6	1	0
3	8	1	6	1	0
4	6	1	5	0	0
5	7	0	6	1	0
6	2	1	1	0	大会抄録

Volume 87

号	掲載論文数	Review	Full	Short	Other
1	7	0	7	0	0
2	8	1	6	1	0
3	7	1	6	0	1
4					
5					
6					

2. 論文投稿状況（9月11日現在）

	2012.1.1 - 2012.9.11	2011.6.28 - 2011.12.31 (参考)
投稿論文数	48	42
採択論文数	12	23
不採択論文数	14	16
校閲中又は 取下げ論文数	22	1
採 択 率	46% (12/26)	59% (23/39)

3. 新システムへの移行

J-STAGE3 への移行 (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/ggs>). 最初の公開雑誌となった.

4. PDF の読み取り可能化

オンラインで公開されているPDFを読み取り (copy and paste) 可とした. 但し変更は不可としている (J-STAGE での推奨).

5. 研究成果公開促進費

次年度から研究成果公開促進費に「国際情報発進力強化」の項目が足され, 期間5年の助成が加えられるので, アジア各国の編集委員を加える等の方策を検討した.

2012年度日本遺伝学会木原賞候補者推薦書

推薦者：高木 信夫（北海道大学名誉教授・日本遺伝学会名誉会員）

受賞候補者：佐々木裕之（九州大学生体防御医学研究所 教授）

・略歴

学歴・職歴

- 1982年3月 九州大学医学部卒業
- 6月 九州大学医学部第一内科（柳瀬敏幸教授）入局 研修医
- 1983年4月 九州大学大学院医学研究科入学（生理系専攻・高木康敬教授、関口陸夫教授）
- 1986年4月 日本学術振興会特別研究員
- 1987年3月 九州大学大学院医学系研究科修了（医学博士）
- 5月 九州大学遺伝情報実験施設（榑 佳之教授）助手
- 1990年4月 英国 Cambridge AFRC 動物生理学遺伝学研究所（Azim Surani 主任研究員）・上原記念財海外留学助成リサーチフェローおよび日本学術振興会特定国派遣研究者として留学
- 1992年10月 英国 Cambridge 大学 Wellcome/CRC 研究所（Azim Surani 教授）・Wellcome Trust 海外リサーチフェロー
- 1993年4月 九州大学遺伝情報実験施設病因遺伝子分野（服巻保幸教授）助教授
- 1995年4月 国立遺伝学研究所応用遺伝研究部門 客員助教授（併任）
- 1998年12月 国立遺伝学研究所総合遺伝研究系人類遺伝研究部門 教授
- 1999年4月 国立遺伝学研究所総合遺伝研究系 研究主幹
総合研究大学院大学生命科学研究科遺伝学専攻 教授（併任）
- 2010年1月 九州大学生体防御医学研究所ゲノム機能制御学部門 教授
- 2010年6月 九州大学 主幹教授
- 2011年4月 九州大学生体防御医学研究所 副所長
九州大学エピゲノムネットワーク研究センター センター長
- 2012年4月 九州大学生体防御医学研究所 所長



- ・研究題目：（和文）哺乳類のゲノム刷り込みのエピジェネティック制御機構の研究
（英文）Studies on the epigenetic mechanisms regulating mammalian genomic imprinting

・推薦理由

佐々木裕之博士は、哺乳類のゲノム刷り込みをモデルとして日本のエピジェネティクス研究をリードしてきたパイオニアであり、日本遺伝学会木原賞に相応しい候補者として推薦申し上げます。

佐々木博士の研究歴は遺伝病の解析に始まります。しかし、ある優性遺伝病のモデルマウスで遭遇した奇妙な現象からゲノム刷り込み（genomic imprinting）に興味を持ち、その分子機構の解明に取りかかりました。このマウスではトランスジーンが母由来時にメチル化され、父由来時には非メチル化状態を保つという、親の性に依存した DNA メチル化パターンを示しました。当時、ゲノム刷り込み現象の存在は知られていましたが、内在性の刷り込み遺伝子はまだ同定されておらず、刷り込みの分子機構の研究はこのようなモデル系の解析から始まったのです。佐々木博士はこのトランスジーンの詳細なメチル化パターン、染色体組み込み位置、メチル化の確立時期などを報告し（*Development* 1991; *Development* 1992）、内在性の刷り込みとの関連性を議論しました。

その後、佐々木博士はゲノム刷り込み研究の第一人者である英国ケンブリッジ大学の Azim Surani 博士のもとへ留学し、丁度 *Igf2*、*H19* などマウスの内在性刷り込み遺伝子が発見されたことと相まって、その機構の解明に多大な業績をあげました（*Genes Dev.* 1992; *Nature* 1993）。この際には、トランスジーンでの経験を踏まえて *Igf2*、*H19* がアレル特異的にメチル化されることを発見し、内在遺伝子の刷り込みが DNA メチル化と相関することを世界で初めて示しました。これは後に米国の Shirley Tilghman 博士によって提唱された *Igf2* と *H19* の「エンハンサー競合モデル」、及び「メチル化感受性インスレーター制御モデル」の基礎となった非常に重要な発見でした。

帰国後は自分のグループを持って刷り込み研究に専念し、独自に *Igf2*、*H19* 遺伝子のアレル特異的な発現制御機構の解析を進めたほか（*Development* 1995; *Genome Res.* 2000; *Genome Res.* 2005）、理化学研究所の林崎良英博士との共同研究により新規のマウス刷り込み遺伝子を多数同定しました（*Nat. Genet.* 1994; *Nat. Genet.* 1996）。X染色体の不活性化を研究していた私が佐々木博士と知り合ったのはこの頃であり、共同研究こそありませんが、同じ分野の研究者として種々の会合で親しく話をするようになりました。上述の新規刷り込み遺伝子同定は林崎博士の研究室で行なわれた仕事ですが、刷り込みの専門家である佐々木博士の貢献が大であったと思います。

1998年に国立遺伝学研究所の教授に就任してからは、上述の研究に加えて、いよいよ刷り込み機構の本丸である雌雄の配偶子形成過程における性特異的なメチル化の確立機構に挑み始めました。ゲノム刷り込み機構の研究にあっては、生殖細胞における「刷り込み」の実体を解明することが必須であることは衆知のことでしたが、微量のサンプルを対象とすることから多くの研究者が二の足を踏んでいました。佐々木博士はこのテーマに果敢に取り組みました。彼はまず種々の発生段階の雄性生殖

細胞を採取し、微量の DNA を用いて *H19* 遺伝子の刷り込み制御領域 (ICR) のメチル化が前精原細胞で確立されることを明らかにしました (*Genes Cells* 2000). さらに、米国の En Li 博士らと協力して *de novo* DNA メチル化酵素 DNMT3a によるメチル化が刷り込みに必須であることを証明しました (*Nature* 2004). これはこの分野のランドマーク的な仕事で、*DNMT3a* 及び *DNMT3b* 遺伝子の欠損マウスがそれぞれ致死であるため、conditional knockout の手法を用いて両遺伝子の生殖細胞特異的な欠損マウスを作製することで初めて明らかにできたことでした。さらに彼は、DNMT3a によって精子または卵子で確立された ICR のメチル化を、受精直後のゲノムワイドな脱メチル化に抗して維持する酵素を同定しました (*Genes Dev.* 2008). この時には、「初期胚には特別な維持メチル化酵素が存在する」という定説を覆し、通常の維持型メチル化酵素である Dnmt1 の卵蓄積型と胚型 (体細胞型) が協調して働くことを見つけました。

続いて佐々木博士は、DNMT3a が如何にして特定の ICR 配列を認識してメチル化するのかという問題に取り組みました。分裂酵母や植物における知見をもとに、生殖細胞の小分子 RNA がメチル化酵素を特定の標的配列にリクルートするのではないかという仮説を立て、*Rasgrf1* 遺伝子の ICR の雄性生殖細胞におけるメチル化に piwi-interacting RNA (piRNA) という小分子 RNA が必須の役割を果たすことを見つけました (*Science* 2011). 予測がびたりと当たった訳です。またそこに至る過程で、哺乳類で初めて piRNA 及び small interfering RNA (siRNA) を発見したほか (*Genes Dev.* 2006; *Nature* 2008), それらの生成機構の解明、レトロエレメントのメチル化や抑制への関与等について多大な成果をあげました (*Genes Dev.* 2008; *Dev. Cell* 2009; *Genes Dev.* 2009; *Dev. Cell* 2011). なかでも卵子における siRNA の発見は、哺乳類に内在性 siRNA は存在しないとする定説を覆すもので、驚きを持って迎えられるべきでした (*Nature* 2008). そこでは次世代シーケンサーを用いた網羅的な siRNA 配列解析とマッピングにより、RNA 依存性 RNA ポリメラーゼを持たない哺乳類の卵子が自然に形成される二本鎖 RNA (ヘアピン構造やセンス・アンチセンス等) を前駆体として siRNA を生成することを明らかにしました。また、この siRNA の一部が偽遺伝子に由来し、相同な配列を持つ遺伝子の mRNA を分解する働きがあることも示しました。少なくとも卵子において偽遺伝子は明確な機能を持っていたのです。

このように佐々木博士は「ゲノム刷り込み」や「エピジェネティクス」という言葉がまだ市民権を得ていなかった1980年代後半から刷り込み機構の研究を始め、この分野のパイオニアとして独創的な成果を上げ続けてきました。現時点で引用回数が100回を超える論文は15報あり、2004年の *Nature* の引用回数は370回を超えています。この分野の論文としては非常に高い引用度を誇っていると思います。また、長年の彼の業績に基づいて2008年には *Nat. Rev. Genet.* から総説の執筆を依頼され、この論文もすでに引用回数130回を数えています。

佐々木博士は長きにわたる日本遺伝学会会員であり、多くの大会でシンポジウム企画や講演等を行なった実績を持っています。2011年より評議員及び賞等の選考委員を務め、今年の第84回大会では事務局長を引き受けているそうです。特定領域研究の代表者としても学術を推進しておられますが、率直、公正かつ柔軟な人柄であり、若手に慕われるリーダーとしての地位を確立しておられます。齢50半ばの彼が今後10年間でどのような研究を展開してくれるのか、期待に胸を踊らせているのは私だけではないでしょう。

以上、遺伝学分野における優れた業績に基づき、日本遺伝学会木原賞候補者として佐々木裕之博士を強くご推薦申し上げます。疑問の点がございましたら何なりとお尋ねください。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

2012年度日本遺伝学会奨励賞候補者推薦書

推薦者：岩崎 博史（東京工業大学 大学院 生命理工学研究科 生体システム専攻 情報・形態形成学講座 教授）

受賞候補者：一柳 健司（九州大学生体防御医学研究所 助教）



・略歴 <学歴>

- 1994年3月 名古屋大学理学部分子生物学科 卒業（指導教員：饗場弘二）
- 1996年3月 大阪大学大学院医学研究科修士課程医科学専攻 修了（指導教員：品川日出夫）
- 2000年3月 大阪大学大学院理学研究科博士課程生物科学専攻 修了（指導教員：京極好正，森川耿右）
- 2000年3月 理学博士号 取得

<職歴>

- 2000年4月 米国 NY 州保健省 Wadsworth Center 研究所 博士研究員（Marlene Belfort 研究室）
- 2002年6月 東京大学分子細胞生物学研究所染色体動態分野 博士研究員（大坪栄一研究室）
- 2003年4月 東京工業大学大学院生命理工学研究科進化統御学講座 21世紀 COE 助手（岡田典弘研究室）
- 2007年4月 国立遺伝学研究所人類遺伝研究部門 助教（佐々木裕之研究室）
- 2010年4月 九州大学生体防御医学研究所エピゲノム学分野 助教（佐々木裕之研究室）

・遺伝学会における活動歴

- 2007年 日本遺伝学会入会
- 2009年 第81回年会ワークショップにて選抜口頭発表，一般講演にて口頭発表
- 2010年 第82回年会一般講演にて口頭発表
- 2011年 第83回年会ワークショップ オーガナイザー，口頭発表

・研究題目：（和文）レトロトランスポソンの転移機構および宿主との相互作用に関する研究

（英文）Biology of retrotransposons: the mobility mechanism and their functions in host epigenomic regulation

・推薦理由

一柳健司会員は、ゲノムの改変や DNA 修復の分子機構を一貫して研究してきました。修士課程では品川日出夫教授（阪大微研）のもと、大腸菌の組換え中間体 Holliday 構造解消酵素（リゾルバーゼ）の研究に取り組み（文献17）。博士課程では阪大蛋白質研究所で京極好正教授、森川耿右博士に師事して、プロテイン・スプライシングと DNA 切断活性という2つの異なった機能を持つタンパク質について、機能解析と結晶構造解析を行いました（文献14～16）。学位取得後、米国 Belfort 研に留学し、これ以降、レトロトランスポソンの研究を非常に精力的に展開しています。

Belfort 研では、乳酸菌のグループIIイントロンがRNAを介して転移すレトロトランスポジションに着目し、遺伝学的、生化学的手法を用いてその分子機構を解明しました（文献11～13）。一柳会員は、レトロトランスポジションは逆スプライシング反応と逆転写反応によって起こることを示し、さらに多くの緻密な実験データを元に、DNA複製の進行時に生じるラギング鎖鋳型上の単鎖DNA領域が逆スプライシング反応のターゲットになっていることを示しました。この研究はグループIIイントロンのレトロトランスポジション反応の分子メカニズムを初めて明らかにした先駆的研究であり、現在高く評価されています。

帰国後、東大・大坪栄一研究室のポスドクを経て、東工大の岡田典弘教授の研究室で21世紀COE助手の職を得て、脊椎動物のレトロトランスポソンの研究を展開しました（文献4～10）。レトロトランスポソンはLINE、SINE、LTR因子の3種に大別されます。一柳会員は、魚類LINEの転移反応を解析するため、当時、多くの脊椎動物のゲノム配列が決定され始めていたことを利用して、「他のトランスポソンに転移したレトロトランスポソン」をゲノム情報から抽出して解析するTANT法（Target Analysis of Nested Transposons）を開発しました（文献7，主要論文）。この方法を用いて、ゼブラフィッシュのLINEの転移によって、LINE配列の5'側由来未知の配列が挿入されていることを発見しました。また、このような挿入はヒトLINEにはほとんどないことを明らかにしています（文献5，7）。加えて、ゼブラフィッシュLINEはヒト培養細胞で転移させると5'側の挿入が起こらないことを示し、5'側のプロセッシングは宿主因子によって触媒されている可能性を提唱しました（文献7）。さらにニワトリ、オポッサム、ウシについても解析し、様々な宿主の様々な種類のLINEにTANT法を適用して、5'側のプロセッシングはLINEのタイプにはよらず、宿主によって決まっていることを明らかにし、上記の仮説を確固たるものにしていきます（文献5，9）。

2007年からは遺伝研佐々木裕之研究室（現・九大生体防御医学研究所）に移り、マウスのレトロトランスポソンの制御機構を研究しています（文献1～3）。マウスでは、LINEやLTR因子がDNAメチル化などのエピジェネティックな機構によって制御されていることが分かっていますが、SINEについては、その制御機構が全く分かっておりませんでした。一柳会員は、

エピジェネティックな修飾が激変する生殖細胞形成期に注目して研究を行い、1) SINE は体細胞ではメチル化されているが、生殖細胞で脱メチル化と再メチル化を受け、再メチル化には Dnmt3a が重要な役割を持つこと、2) SINE 密度が高い領域は核の内側に局在し、LINE 密度が高いゲノム領域は核膜側に局在すること、3) 核膜側に局在する領域ほど Dnmt3a の依存性が高いこと、4) SINE がプロモーター内に存在すると、体細胞ではその遺伝子の発現が抑えられ生殖細胞で高発現することなど、SINE の DNA メチル化ダイナミクスやその分子機構、また、SINE による転写制御やその進化学的意義を明らかにするとともに、生殖細胞のエピジェネティック・リプログラミングにおけるゲノムの核内三次元分布の重要性を世界に先駆けて提唱しています(文献2、主要論文)。さらに、生殖細胞では低分子 RNA の一種である piRNA がレトロトランスポソンの制御に関与していることが分かっていたが、一柳会員は、SINE は piRNA による制御を受けておらず、piRNA とレトロトランスポソンの関係も多種多様であることを示しました(文献2、3)。現在、piRNA によって制御を受ける LTR 因子と受けない LTR 因子を多数同定して詳細な解析をすすめており、piRNA とレトロトランスポソンの関係について重要な知見が続々と発見されつつあります

このように、一柳健司会員は、レトロトランスポゾン研究においてその転移機構に始まりその制御機構や宿主エピゲノムとの関係など、現在まさにその重要さが認識されつつある新しい研究分野で精力的に研究しています。しかも、彼の研究成果は、既に当該研究分野の発展に大きな貢献を果たし、新しい概念を生み出しています。これはもとより一柳会員の高い研究推進能力の賜ですが、それは、在籍したそれぞれの研究室でそれぞれ卓越した研究成果を残していることから明白であります。また、毎回の遺伝学会年会において多様なセッションで積極的に発言している一柳会員の姿が見受けられますが、このことは同会員が幅広い知識や視野をもち、知的好奇心旺盛な明朗快活な若手研究者であることを証明しています。すなわち、一柳健司会員は、エピジェネティクス研究分野におけるレトロトランスポソンの分子寄与の解析において既に大きな貢献をし世界を牽引するパイオニアの一人であり、まさに前途有望な若手研究者です。また、彼の高いサイエンティフィックな能力に加えて、その人柄から、彼が日本遺伝学会の未来を牽引していくリーダーに必ずしやならんと強く期待されます。以上のことから、一柳健司会員を2012年度日本遺伝学会奨励賞に心より推薦します。

原著論文

1. **Ichiyanagi, K.** (2012) "Inhibition of MspI cleavage activity by hydroxymethylation of the CpG site: A concern for DNA modification studies using restriction endonucleases." **Epigenetics** 7, 131-136
2. **Ichiyanagi, K.**, Li, Y., Watanabe, T., Ichiyanagi, T., Fukuda, K., Kitayama, J., Yamamoto, Y., Kuramochi-Miyagawa, S., Nakano, T., Yabuta, Y., Seki, Y., Saitou, M. and Sasaki, H. (2011) "Locus- and domain-dependent control of DNA methylation at mouse B1 retrotransposons during male germ cell development." **Genome Res.** 21, 2058-2066
3. Watanabe, T., Tomizawa, S., Mitsuya, K., Totoki, Y., Yamamoto, Y., Kuramochi-Miyagawa, S., Iida, N., Hoki, Y., Murphy, P.J., Toyoda, A., Gotoh, K., Hiura, H., Arima, T., Fujiyama, A., Sado, T., Shibata, T., Nakano, T., Lin, H., **Ichiyanagi, K.**, Soloway, P. D. and Sasaki, H. (2011) "Role for piRNAs and non-coding RNA in de novo DNA methylation of the imprinted mouse Rasgrfl locus." **Science** 332, 848-852
4. Suzuki, J., Yamaguchi, K., Kajikawa, M., **Ichiyanagi, K.**, Adachi, N., Koyama, H., Takeda, S. and Okada, N. (2009) "Genetic evidence that the non-homologous end-joining repair pathway is involved in LINE retrotransposition." **PLoS Genet.** 5:e1000461
5. **Ichiyanagi, K.** and Okada, N. (2008) "Mobility pathways for vertebrate L1, L2, CR1, and RTE clade retrotransposons." **Mol Biol Evol** 25, 1148-1157
6. **Ichiyanagi, K.**, Nishihara, H., Duvernell, D. D. and Okada, N. (2007) "Acquisition of endonuclease specificity during evolution of L1 retrotransposon." **Mol Biol Evol** 24, 2009-2015
7. **Ichiyanagi, K.**, Nakajima, R., Kajikawa, M. and Okada, N. (2007) "Novel retrotransposon analysis reveals multiple mobility pathways dictated by hosts." **Genome Res** 17, 33-41
8. Honda, H., **Ichiyanagi, K.**, Suzuki, J., Ono, T., Koyama, H., Kajikawa, M. and Okada, N. (2007) "A new system for analyzing LINE retrotransposition in the chicken DT40 cell line widely used for reverse genetics." **Gene** 395, 116-124
9. **Ichiyanagi, K.**, and Okada, N. (2006) "Genomic alterations upon integration of zebrafish L1 elements revealed by the TANT method." **Gene** 383, 108-116
10. Kajikawa, M., **Ichiyanagi, K.**, Tanaka, N. and Okada, N. (2005) "Isolation and characterization of active LINE and SINEs from the eel." **Mol Biol Evol** 22, 673-682
11. Conlan, L. H., Stanger, M. J., **Ichiyanagi, K.** and Belfort, M. (2005) "Localization, mobility and fidelity of retrotransposed Group II introns in rRNA genes." **Nucleic Acids Res** 33, 5262-5270
12. **Ichiyanagi, K.**, Beaugard, A. and Belfort, M. (2003) "A bacterial group II intron favors retrotransposition into plasmid targets." **Proc Natl Acad Sci USA** 100, 15742-15747
13. **Ichiyanagi, K.**, Beaugard, A., Lawrence, S., Smith, D., Cousineau, B. and Belfort, M. (2002) "Retrotransposition of the L1. LtrB group II intron proceeds predominantly via reverse splicing into DNA targets." **Mol Microbiol** 46, 1259-1272
14. **Ichiyanagi, K.**, Ishino, Y., Ariyoshi, M., Komori, K. and Morikawa, K. (2000) "Crystal structure of an archaeal intein-encoded homing endonuclease PI-PfuI." **J Mol Biol** 300, 889-901

15. Komori, K., Fujita, N., **Ichiyangi, K.**, Shinagawa, H., Morikawa, K. and Ishino, Y. (1999) "PI-PfuI and PI-PfuII, intein-coded homing endonucleases from *Pyrococcus furiosus*. I. Purification and identification of the homing-type endonuclease activities." **Nucleic Acids Res** 27, 4167–4174
16. Komori, K., **Ichiyangi, K.**, Morikawa, K. and Ishino, Y. (1999) "PI-PfuI and PI-PfuII, intein-coded homing endonucleases from *Pyrococcus furiosus*. II. Characterization Of the binding and cleavage abilities by site-directed mutagenesis." **Nucleic Acids Res** 27, 4175–4182
17. **Ichiyangi, K.**, Iwasaki, H., Hishida, T. and Shinagawa, H. (1998) "Mutational analysis on structure-function relationship of a holliday junction specific endonuclease RuvC." **Genes Cells** 3, 575–586

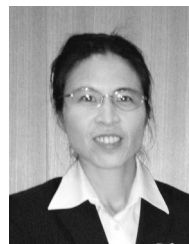
総説 (和文)

18. 一柳健司, 佐々木裕之 (2009) 「ゲノムワイドな DNA メチル化解析」分子細胞治療 8, 372–376
19. 一柳健司 (2008) 「カモノハシ・ゲノムから見た哺乳類の進化」科学 78, 8817–8819

2012年度日本遺伝学会奨励賞候補者推薦書

推薦者：斎藤 成也（国立遺伝学研究所 集団遺伝研究部門 教授）

受賞候補者：高橋 文（首都大学東京 大学院理工学研究科 生命科学専攻 進化遺伝学研究室 准教授）



・略歴

1994年3月 北海道大学 農学部 卒業
1996年3月 北海道大学 大学院農学研究科 修士課程 修了（農学修士）
1997年7月～2000年9月 米国シカゴ大学に留学
2000年12月 北海道大学 大学院農学研究科 博士課程 修了（博士（農））
2001年4月～2003年3月 日本学術振興会特別研究員（PD）|国立遺伝学研究所にて研究|
2003年3月～2012年3月 国立遺伝学研究所集団遺伝研究部門 助教
2012年4月 首都大学東京 大学院理工学研究科 生命科学専攻 准教授（現職）

・遺伝学会における活動歴

男女共同参画推進特別委員会 委員（現在）

・研究題目：（和文）ショウジョウバエにおける進化遺伝学研究
（英文）Evolutionary genetics of *Drosophila*

・推薦理由

高橋 文氏は、シカゴ大学の Chung-I Wu 教授のもとに留学された大学院生時代から、主としてモデル生物であるショウジョウバエを実験材料に用い、集団遺伝学的な考え方をベースに、次のような進化生物学の研究テーマに取り組んでこられました：A) 種分化の遺伝的プロセスの理解、B) 生態学的形質の遺伝的基盤の解明、C) 体色変異と行動変異の関連性の解明、D) 多面発現遺伝子のシス制御領域の進化機構の解明。特に、実験室での研究の出発点として、野外の自然集団のハエをサンプリングし、それらと比較することによって、地域による表現型の差異が生じた進化的な意味を考察している点で、ショウジョウバエの遺伝学研究としても優れているだけでなく、進化遺伝学からみても大きな貢献をされています。

現在までに18編の論文を発表されていますが、そのうちの2編（論文番号2と8）を添付しました。これらは、Thomas Hunt Morgan の時代から知られていたショウジョウバエ胸部表面の色素の濃淡を制御する *ebony* 遺伝子についての研究です。どちらも、今年の3月まで所属されていた国立遺伝学研究所集団遺伝研究部門の高野研究室で行なわれた研究の成果です。論文8（2007年に *Genetics* 誌に発表）で、集団間に表現型の差をもたらす遺伝子を連鎖解析で求めたところ、*ebony* だった報告し、論文2（2011年に *Molecular Ecology* 誌に発表）では、この発見をもとに、エンハンサーを突き止めています。また、熱帯と温帯という生息域の違いに着目し、おそらくこの地域変異は、温度変化に対する適応の結果ではないかと推測しています。

高橋 文氏は、2011年度から新学術研究領域研究「ゲノム・遺伝子相関～新たな遺伝学の創出～」に採択され、「体色の多様化が生む脳遺伝子の発現変化と性行動不適合性の解析」に関する研究を展開されています。また、今年4月には首都大学東京の准教授に移られ、今後大きな研究の進展が期待されます。

以上の理由から、高橋 文氏を日本遺伝学会奨励賞に推薦させていただきます。

高橋 文氏 原著論文

（○は添付した主要論文2編、*は Corresponding Author）

- 1) *Takahashi, A., Fujiwara-Tsujii, N., Yamaoka, R., Itoh, M., Ozaki, M. and Takano-Shimizu, T. (2012) Cuticular hydrocarbon content that affects male mate preference of *Drosophila melanogaster* from West Africa. **International Journal of Evolutionary Biology** (Epub 2012 Mar 28).
- 2) ○*Takahashi, A. and Takano-Shimizu, T. (2011) Divergent enhancer haplotype of *ebony* on inversion *In (3R) Payne* associated with pigmentation variation in a tropical population of *Drosophila melanogaster*. **Molecular Ecology** 20, 4277–4287.
- 3) *Sawamura, K., Maehara, K., Mashino, S., Kagesawa, T., Kajiwar, M., Matsuno, K., Takahashi, A. and Takano-Shimizu, T. (2010) Introgression of *Drosophila simulans nuclear pore protein 160* in *Drosophila melanogaster* alone does not cause inviability but does cause female sterility **Genetics** 186, 669–676.
- 4) *Takahashi, A. (2009) Effect of exonic splicing regulation on synonymous codon usage in alternatively spliced exons of *Dscam*. **BMC Evolutionary Biology** 9, 214.
- 5) Fujikawa, K., *Takahashi, A., Nishimura, A., Itoh, M., Takano-Shimizu, T. and Ozaki, M. (2009) Characteristics of genes up-regulated and down-regulated after 24 h starvation in the head of *Drosophila*.. **Gene** 446, 11–17.
- 6) Watanabe, Y., Takahashi, A., Itoh, M. and *Takano-Shimizu, T. (2009) Molecular spectrum of spontaneous *de novo* mutations in male and female germline cells of *Drosophila melanogaster*. **Genetics** 181, 1035–1043.
- 7) Liu, Y.-H., Takahashi, A., Kitano, T., Koide, T., Shiroishi, T., Moriwaki, K. and *Saitou, N. (2008) Mosaic genealogy of the

- Mus musculus* genome revealed by 21 nuclear genes from its three subspecies. **Genes and Genetic Systems** *83*, 77–88.
- 8) ○*Takahashi, A., Takahashi, K., Ueda, R. and Takano-Shimizu, T. (2007) Natural variation of *ebony* gene controlling thoracic pigmentation in *Drosophila melanogaster*. **Genetics** *177*, 1233–1237.
 - 9) *Yoshiura, K., Kinoshita, A., Ishida, T., Ninokata, A., Ishikawa, T., Kaname, T., Bannai, M., Tokunaga, K., Sonoda, S., Komaki, R., Ihara, M., Saenko, V. A., Alipov, G. K., Sekine, I., Komatsu, K., Takahashi, H., Nakashima, M., Sosonkina, N., Mapendano, C. K., Ghadami, M., Nomura, M., Liang, D.-S., Miwa, N., Kim, D.-K., Garidkhuu, A., Natsume, N., Ohta, T., Tomita, H., Kaneko, A., Kikuchi, M., Russomando, G., Hirayama, K., Ishibashi, M., Takahashi, A., Saitou, N., Murray, J. C., Saito, S., Nakamura, Y. and Niikawa, N. (2006) A SNP in the *ABCC11* gene is the determinant of human earwax type. **Nature Genetics** *38*, 324–330.
 - 10) *Takahashi, A. and Takano-Shimizu, T. (2005) A high frequency null mutant of an odorant-binding protein gene, *Obp57e*, in *Drosophila melanogaster*. **Genetics** *170*, 709–718.
 - 11) *Takahashi, A., Liu, Y.-H. and Saitou, N. (2004) Genetic variation versus recombination rate in a structured population of mice. **Molecular Biology and Evolution** *21*, 404–409.
 - 12) *Takahashi, A. and Ting, C.-T. (2003) Genetic basis of sexual isolation in *Drosophila melanogaster*. **Genetica** *120*, 273–284.
 - 13) Fang, S., Takahashi, A. and *Wu, C.-I. (2002) A mutation in the promoter of desaturase 2 is correlated with sexual isolation between *Drosophila* behavioral races. **Genetics** *162*, 781–784.
 - 14) Takahashi, A., Tsaur, S.-C., Coyne, J. A. and *Wu, C.-I. (2001) The nucleotide changes governing cuticular hydrocarbon variation and their evolution in *Drosophila melanogaster*. **Proceedings of National Academy of Sciences USA** *98*, 3920–3925.
 - 15) Ting, C.-T., Takahashi, A. and *Wu, C.-I. (2001) Incipient speciation by sexual isolation in *Drosophila* : Concurrent evolution at multiple loci. **Proceedings of National Academy of Sciences USA** *98*, 6709–6713.
 - 16) *Nishihara-Takahashi, A. (1999) Faster growth of head size of pre-feeding larvae in a cannibalistic population of the salamander *Hynobius retardatus*. **Zoological Science** *16*, 303–307.
 - 17) *Nishihara, A. (1996) High density induces a large head in larval *Hynobius retardatus* from a low density population. **Japanese Journal of Herpetology** *16*, 134–136.
 - 18) *Nishihara, A. (1996) Effects of density on growth of head size in larvae of the salamander *Hynobius retardatus*. **Copeia** *1996*, 478–483.

2012年度日本遺伝学会名誉会員候補者推薦書

推薦者：安永 照雄（大阪大学微生物病研究所 教授）

受賞候補者：宮田 隆（京都大学 名誉教授）



・略歴 <学歴>

- 1964年（昭和39年）早稲田大学工学部応用物理学科卒業
- 1969年（昭和44年）早稲田大学大学院工学研究科応用物理学専攻博士課程修了，理学博士
- 1969年（昭和44年）名古屋大学理学部物理学科 助手
- 1973年（昭和48年）九州大学理学部生物学科 助教授
- 1990年（平成2年）京都大学理学部生物物理学教室 教授
- 1995年（平成7年）京都大学大学院理学研究科生物科学専攻生物物理学教室 教授
- 2004年（平成16年）京都大学 名誉教授，JT生命誌研究館 顧問（2010年3月退職），大阪大学大学院理学研究科生物科学専攻 招聘教授（2010年3月退職），早稲田大学工学部電気・情報生命工学科 客員教授（2008年3月退職）

・遺伝学会における活動歴

- 1983年（昭和58年）日本遺伝学会奨励賞受賞
- 1996年（平成8年）日本遺伝学会木原賞受賞
- 2000年（平成12年）日本遺伝学会年次大会・大会委員長（京都大学：11月3～5日）
- 日本遺伝学会評議員（2011～2012年度，他）

・推薦理由

宮田 隆 京都大学名誉教授を遺伝学会名誉会員に推薦申し上げます。宮田博士は、新しい重要な問題を常に模索し、その問題解決にあたって、斬新なアイデアに基づく独自の方法や解析手段を考案することで研究を進めてこられました。こうした研究から宮田博士は独創的な成果を次々と発表してこられました。それらの成果は国際的に高い評価を受け、分子進化学及びバイオインフォマティクス分野の発展に大きく貢献されております。そのご業績の一端は論文リストの抜粋に見ることが出来ます。こうした宮田博士のご業績は日本遺伝学会の名誉会員としてふさわしいものと判断し、推薦いたしました次第です。

宮田博士の幅広いご業績のうち、特に重要と思われるものを以下に列挙します。

バイオインフォマティクス

①遺伝子のタンパク質コード領域の塩基配列比較から、同義置換数とアミノ酸（非同義）置換数を厳密に推定する方法の開発。従来、塩基配列間の置換数を、コドンの第一、第二、第三座位ごとに求め、第三座位を近似的に同義置換と考えていました。宮田博士は、塩基ではなく、コドンを単位に考えれば、同義置換数を厳密に評価できることに気が付きました。この方法は同義・アミノ酸（非同義）置換数の推定のための標準的な方法になっています。

Miyata, T. and Yasunaga, T. (1980) Molecular evolution of mRNA: A method for estimating evolutionary rates of synonymous and amino acid substitutions from homologous nucleotide sequences and its application. *J. Mol. Evol.* **16**, 23-36.

②ホモロジーサーチのためのコンピュータシステムの開発。宮田博士は、1983年、このシステムを利用して肝炎ウイルスとカリフラワーモザイクウイルスに逆転写酵素様配列を発見し、且つ、活性中心を予言されました。後にこれらの配列が逆転写活性を持つことが実験的に証明されました。逆転写酵素はそれまでレトロウイルスのみに存在すると考えられていたので、この発見は話題になり、全生物に普遍的に存在する酵素であるとの認識の突破口となりました。

Toh, H., Hayashida, H. and Miyata, T. (1983) Sequence homology between retroviral reverse transcriptase and putative polymerases of hepatitis B virus and cauliflower mosaic virus. *Nature* **305**, 827-829.

分子進化のメカニズム

③偽遺伝子による中立説の検証。偽遺伝子の分子進化速度は、中立説では最大になり、自然選択説では逆に最小（ゼロ）になる。このことを利用し、宮田博士は、1980年、発見されたばかりのネズミの偽遺伝子の進化速度を計算し、最大の速度で進化していることを初めて明らかにされました。この発見は中立説を支持する強い証拠となりました。

Miyata, T. and Yasunaga, T. (1981) Rapidly evolving mouse alpha-globin-related pseudo gene and its evolutionary history. *Proc. Natl. Acad. Sci. USA* **78**, 450-453.

④オス駆動進化理論（Male-Driven Evolution Theory）の提唱。宮田博士は、オスが進化を決めているという、オス駆動進化理論を1987年に提唱し、データの解析から理論の検証を行われました。この理論によると、XX♀/XY♂とZW♀/ZZ♂型では、性染色体の突然変異率が逆転します。宮田博士は、この性質は理論の検証に重要であることを同時に提唱されました。1997年、スウェーデンのグループによるトリ（ZW♀/ZZ♂型）のデータによって理論が基本的な点で完全に立証されました。

Miyata, T., Hayashida, H., Kuma, K., Mitsuyasu, K. and Yasunaga, T. (1987) Male-driven molecular evolution: A model and nucleotide sequence analysis. *Cold Spring Harbor Symp. Quant. Biol.* vol. LII, 863–867.

⑤形態レベルの進化を分子からどう理解するか、という問題を設定し、宮田博士は、「カンブリア爆発が起きた時、遺伝子レベルでなにが起きていたのか」、という問題を設定し、1990年代前半からその解明のための研究をスタートされました。原始的な多細胞動物からの網羅的遺伝子クローニングと分子系統解析から、予想外の結果が得られました。すなわち、多細胞動物特有の基本的遺伝子のセットは多細胞動物の中で最も原始的な動物であるカイメンとその他の動物が分かれる以前（およそ9億年前）に既に作られていたという結果になりました。この発見は、カンブリア爆発は新しい遺伝子を「作る」ことで達成されたのではなく、既存の遺伝子を「利用」して達成されたことを強く示唆する、と宮田博士は強調しています。

Miyata, T. and Suga, H. (2001) Divergence pattern of animal gene families and relationship with the Cambrian explosion. *BioEssays* 23, 1018–1027.

分子系統進化化学

⑥重複遺伝子による三超生物界の系統関係の解明。地球上の全生物は、真核生物と通常のバクテリアである真正細菌及び異常環境（例えば100度以上の高温の環境）に棲息する古細菌の3つの超生物界に分類されることをウースらは1977年に発見しましたが、それらの分岐の順序が通常の方法では解けず、1980年代後半の分子系統学に於ける最大の関心事でした。1989年、宮田博士はこの難問を解決するために重複遺伝子を使った複合系統樹法を考案され、それを利用して、古細菌が真核生物に近縁で、真正細菌に遠縁であることを明らかにされました。この研究を契機に生物最古の進化の研究が大きく展開しました。

Iwabe, N., Kuma, K., Hasegawa, M., Osawa, S. and Miyata, T. (1989) Evolutionary relationship of archaeobacteria, eubacteria and eukaryotes inferred from phylogenetic tree of duplicated genes. *Proc. Natl. Acad. Sci. USA* 86, 9355–9359.

以上、宮田博士の主なご業績を紹介しましたが、これらはいずれも国際的に高い評価を得ております。なお、これら研究業績が評価され、日本遺伝学会より1983年（昭和58年）に日本遺伝学会奨励賞、1996年（平成8年）に日本遺伝学会木原賞が宮田博士に授与されました。その他、1983年（昭和58年）に朝日新聞社より朝日学術奨励金、2002年（平成14年）には日本進化学会より木村資生記念学術賞（木村賞）が授与されております。

また、宮田博士は2000年（平成12年）に京都で開催された日本遺伝学会年次大会の大会委員長を務めるとともに、評議員等として学会運営その他にも携わってこられました。

以上の研究業績および日本遺伝学会へのご貢献は日本遺伝学会の名誉会員として相応しいものであり、ここに宮田 隆 京都大学名誉教授を日本遺伝学会の名誉会員に推薦致します。

2012年度日本遺伝学会名誉会員候補者推薦書

推薦者：広海 健（国立遺伝学研究所 教授）

受賞候補者：堀田 凱樹（東京大学 名誉教授，国立遺伝学研究所 名誉教授）



・略歴 <学歴>

- 1968年3月 東京大学医学系大学院基礎医学博士課程卒業，医学博士
- 1968年10月 東京大学医学部薬理学教室 助手
- 1968年4月 カリフォルニア工科大学研究員（1972年3月まで）
- 1972年4月 東京大学理学部物理学教室 講師
- 1973年4月 同 助教授
- 1986年1月 同 教授（1993年3月まで）
- 1990年9月 国立岡崎共同研究機構・基礎生物学研究所 客員教授（併任）（1996年3月まで）
- 1993年4月 東京大学大学院理学系研究科 教授（1997年9月まで）
- 1997年10月 国立遺伝学研究所 所長，総研大遺伝学専攻 専攻長／教授（2004年11月まで）
- 1997年10月 東京大学大学院理学系研究科 教授（併任）（1998年3月まで）
- 2004年12月 情報・システム研究機構 機構長（2011年11月まで）

・遺伝学会における活動歴

【会長歴】

- ・1999年1月1日～2002年12月31日

【評議員歴】

- ・1981年1月1日～1984年12月31日
- ・1989年1月1日～1992年12月31日
- ・1995年1月1日～1998年12月31日

・推薦理由

堀田凱樹博士は遺伝学の発展に関して数々の功績を残されました。

第一は「行動遺伝学」という分野の開拓です。堀田博士は1968年に東京大学医学系研究科薬理学教室で医学博士号取得したのち，ショウジョウバエを使って高次機能と遺伝子を結びつける研究を開始しようとしていたアメリカ合衆国カリフォルニア工科大学の Seymour Benzer 教授の研究室にポストドクとして参加しました。まず，走行性，飛翔，求婚行動，などさまざまな高次機能を定量化する手法を工夫し，それを用いて行動に異常を示す突然体を多数分離することにより，高次機能に関与する主要遺伝子を同定することが可能であることを実証しました。特に有名なのは，遺伝的モザイクを利用して遺伝子の分子情報なしにその作用部位を同定する手法（mosaic fate mapping 法）を開発したことです。現在ではクローニングされた遺伝子を元にして遺伝子発現のパターンを調べることは容易になっていますが，発現場所は必ずしもその遺伝子の機能が必須である場所ではありません。Hotta & Benzer の開発した手法は，遺伝子機能を理解するために最も重要な情報の一つを，分子情報とは独立に同定することを可能にしたという点で画期的であり，多くの人に衝撃と感銘を与えました。

1968年に帰国して東京大学理学部物理学科に PI として着任してから，堀田博士はショウジョウバエを使って行動異常や発生異常の突然変異を利用した研究を率い，脳神経系や筋肉の機能・発生の理解に大きな貢献をされました。この時期の主な業績には，光受容経路におけるリン脂質代謝の役割，飛翔行動に関わる筋タンパク質の同定，シナプス特異性に関与する認識分子の発見，ニューロンとグリアの運命決定機構の解明などが挙げられます。「物理学科」という遺伝学とは異質とも考えられる環境において異分野の学生に遺伝学の偉大な力と魅力を伝え，学生の個性や自由な発想を生かした教育を実施しました。このとき育成された人材は，現在，遺伝学だけでなく，発生生物学，神経科学，言語学等の基礎研究から科学行政まで様々な分野で活躍中です。

堀田博士は日本における遺伝学研究の振興にも大きく貢献しました。基礎生物学研究所の客員教授のポジション（1990-1996年）を利用して日本にもゼブラフィッシュを新たなモデル生物として導入したのもその一つです。1990年代には重点領域研究の総括責任者として生体高次機能の分子生物学的研究を推し進めました。既に名声が確立した研究室主催者に研究費を配るのではなく，躍進中の若手研究者を選抜して直接支援・助言したのが特色の一つです。このときにサポートを受けた若手研究者の多くは現在の日本の生命科学を支える人材となっています。研究者育成に関する堀田博士の努力は，日本における研究支援制度にも大きな影響を与えているといえるでしょう。

堀田博士の貢献は研究そのものだけでなく，研究のための基盤構造にも及んでいます。1997年に堀田博士は東京大学を離れ，大学共同利用機関の一つである国立遺伝学研究所の所長として赴任しました。さらに，2004年には大学共同利用機関の法人化に伴い設置された情報・システム研究機構の初代機構長となりました。これらの活動は，日本の科学研究システムの大規模な改革や整備に自ら携わろうという意図によるものだと考えられます。情報・システム研究機構では新領域融合研究センターを

設置し、異分野の交流による新しい分野創造をめざしました。また、ライフサイエンス統合データベースを立ち上げ、50年先の新しい生命科学の方法を見据えたインフラストラクチャーを準備しました。このような長期的視野に立つての活動は、世界の科学の発展のために大きな貢献としてコミュニティー全体から認識されるだろうと考えます。

このように、堀田凱樹博士は日本遺伝学会に対する功勞（会長や評議委員など）のみならず、遺伝学や生命科学に対する功績が顕著であるため、日本遺伝学会名誉会委員として推薦いたします。

主要論文

1. Hotta, Y. and Tsukui, R. (1968). Effect on the guinea-pig taenia coli of the substitution of strontium and barium ions for calcium ions. *Nature* **217**, 867–869.
2. Hotta, Y. and Benzer, S. (1969). Abnormal electroretinograms in the visual mutants of *Drosophila*. *Nature* **222**, 354–356.
3. Hotta, Y. and Benzer, S. (1972). Mapping of behavior in *Drosophila* mosaics. *Nature* **240**, 527–535.
4. Hotta, Y. and Benzer, S. (1976). Courtship in *Drosophila* mosaics, — Sex-specific foci for sequential action patterns. *Proc. Natl. Acad. Sci. USA* **73**, 4154–4158.
5. Mogami, K., Fujita, S. C. and Hotta, Y. (1982). Identification of *Drosophila* indirect flight muscle myofibrillar proteins by means of two-dimensional electrophoresis. *J. Biochem.* **91**, 643–650.
6. Yoshioka, T., Inoue, H. and Hotta, Y. (1985). Absence of phosphatidylinositol phosphodiesterase in the head of a *Drosophila* visual mutant, *norpA* (no receptor potential A). *J. Biochem.* **97**, 1251–1254.
7. Hiromi, Y. and Hotta, Y. (1985). Actin gene mutations in *Drosophila*; Heat shock activation in the indirect flight muscles. *EMBO J.* **4**, 1681–1687.
8. Masai, I., Okazaki, A., Hosoya, T. and Hotta, Y. (1993). *Drosophila* retinal degeneration A (*rdgA*) gene encodes an eye-specific diacylglycerol kinase with cysteine-rich zinc finger motif and ankyrin repeats. *Proc. Natl. Acad. Sci. USA* **90**, 11157–11161.
9. Inoue, A., Hatta, K., Hotta, Y. and Okamoto, H. (1994). Developmental regulation of *Islet-1* mRNA expression during neuronal differentiation in embryonic zebrafish. *Developmental Dynamics* **199**, 1–11.
10. Chiba, A., Snow, P., Keshishian, H. and Hotta, Y. (1995). Fasciclin III as a synaptic target recognition molecule in *Drosophila*. *Nature* **374**, 166–168.
11. Hosoya, T., Takizawa, K., Nitta, K. and Hotta, Y. (1995). Glial cells missing: A binary switch between neuronal and glial determination in *Drosophila*. *Cell* **82**, 1025–1036.
12. Hiramoto, M., Hiromi, Y. and Hotta, Y. (2000). The *Drosophila* Netrin receptor *Frazzled*, guides axons by controlling Netrin distribution. *Nature* **406**, 886–889.
13. Umesonu, Y., Hiromi, Y. and Hotta, Y. (2002). Context-dependent utilization of Notch activity in *Drosophila* glial determination. *Development* **129**, 2391–2399.

「エピジェネティクスの制御と生命機能」 研究領域 成果報告会

細胞内で奏でる生命のシンフォニーの指揮者“エピジェネティクス”

遺伝子の多様な発現制御をつかさどるエピジェネティクスの重要性がますます認識されつつあります。

ライフサイエンス分野の戦略重点科学技術「生命プログラム再現科学技術」の戦略目標“細胞プログラミングに立脚した幹細胞作成・制御による革新的医療基盤技術の創出”に基づいて、科学技術振興機構（JST）の戦略的創造研究推進事業として、さきがけ「エピジェネティクスの制御と生命機能」領域が平成21年に発足しました。

- (1) エピジェネティクス制御機構の解明
- (2) 生命現象とエピジェネティクスの関わりの解明
- (3) エピジェネティクスの多様性や異常に関わる疾患の解析
- (4) エピジェネティクスに関わる技術開発

について研究を進めてまいりましたので、一期生の成果報告会を開催致します。

研究総括 向井常博

多数の研究者にご参加頂き、活発な討議を期待しております

【プログラム】(仮題)

- | | |
|--|---------------------|
| 1. DNAメチル化制御機構の構造基盤 | (京都大学) 有吉 真理子 |
| 2. 化学基盤高性能DNAメチル化可視化系の確立 | (東京大学) 岡本 晃充 |
| 3. エピジェネティックな遺伝子発現切り替わりメカニズムの解明 | (福井大学) 沖 昌也 |
| 4. ヘテロクロマチン確立メカニズムの解明 | (島根大学) 加藤 太陽 |
| 5. 細胞老化のエピジェネティクスとその破綻による発癌機構 | (東京大学) 金田 篤志 |
| 6. 遺伝子領域内のヘテロクロマチン修飾制御 | (沖縄科学技術大学院大学) 佐瀬 英俊 |
| 7. エピジェネティクス制御化合物の創製と応用 | (京都府立医科大学) 鈴木 孝禎 |
| 8. Gene bodyメチル化の生物学的意義と分子機構の解明 | (基礎生物学研究所) 鈴木 美穂 |
| 9. 哺乳類の初期発生を制御するメチル化エピゲノムの解明 | (京都大学) 立花 誠 |
| 10. クロマチンのメチル化修飾消去機構の解明 | (九州大学) 東田 裕一 |
| 11. 転写制御メカニズムにおけるポリコーム群・トリソラックス群遺伝子産物の役割 | (佐賀大学) 西岡 憲一 |

<特別講演>

(独)理化学研究所 ケミカルゲノミクス研究グループ 吉田 稔 グループディレクター

日時:平成25年1月30日

場所:東京ガーデンパレス(御茶ノ水)

参加費:無料

主催:(独)科学技術振興機構

お問い合わせ先:e-mail: khatada@epigenetics.jst.go.jp

(担当:畑田) TEL: (0952)97-8523 URL: <http://www.epigenetics.jst.go.jp/>

◆会 員 異 動◆

新入会・再入会

栗原 美寿々	060-0810	北海道札幌市北区北10条西8丁目 北海道大学大学院生命科学院生命システム科学コース 生殖発生生物学講座 IIIb 木村研究室
濱川 昌之	812-0053	福岡市東区箱崎6-10-1理学部3号館3416 九州大学理学部生物学科 進化遺伝学研究室
高橋 誠弥	390-8621	長野県松本市旭3丁目1-1 信州大学理学部生物科学科 伊藤建夫研究室
四宮 愛	223-8521	神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1 慶應義塾大学・法学部・生物学教室
會津 光博	819-0395	福岡市西区元岡744 九州大学大学院比較社会文化学府生物体系学教室
池崎 由佳		九州大学院システム生命科学府進化遺伝学研究室
降旗 裕子	565-0871	大阪府吹田市山田丘3番地2号 蛋白質研究所7F ゲノム-染色体機能研究室 大阪大学 理学研究科 生物科学専攻 ゲノム-染色体機能研究室
松田 隆子	112-8610	東京都文京区大塚2-1-1 理学部1号館524号室 お茶の水女子大学理学部生物学科松浦研究室
新井 康太	171-8588	東京都豊島区目白1-5-1 学習院大学大学院 自然科学研究科 生命科学専攻 分子遺伝子学研究室
浦志 知恵		九州大学大学院比較社会文化学府生物多様性講座
谷口 群	812-8581	福岡市東区箱崎6-10-1 理学部3号館3416室 九州大学・システム生命科学府・分子遺伝学研究室
岩本 栄介		首都大学東京 理工学研究科 生命科学専攻 進化遺伝学研究室
中島 達郎	812-8582	福岡県福岡市東区馬出3丁目1-1 九州大学生体防御医学研究所 ゲノム機能制御学部門 エビゲノム学分野
福應 温	815-8510	福岡県福岡市南区筑紫丘1-1-1 純真学園大学・保健医療学部・検査科学科
松尾 拓也	812-8581	福岡市東区箱崎6-10-1 理学部3号館4F 3416 九州大学大学院・システム生命科学府・分子遺伝学研究室
長谷川 由紀	230-0045	神奈川県横浜市鶴見区末広町1-7-22 独立行政法人理化学研究所 オミックス基盤研究領域 LSA 要素技術開発ユニット
安田 加奈子	606-8502	京都府京都市左京区北白川追分町 京都大学大学院 農学研究科 育種学研究室
塩谷 達弘	010-0146	秋田県秋田市下新城中野字街道端西241-438 秋田県立大学大学院・生物資源科学研究科・微生物機能グループ 細胞生物学研究室
北園 智弘	812-8581	福岡市東区箱崎6-10-1 九州大学・システム生命科学府システム生命科学専攻・ 分子遺伝学研究室
降旗 初佳	603-8555	京都府京都市北区上賀茂本山 京都産業大学・総合生命科学部・生命資源環境学科
荒木 喜美	860-0811	熊本市中央区本荘2-2-1 熊本大学・生命資源研究・支援センター・疾患モデル分野
荒木 正健	860-0811	熊本市中央区本荘2-2-1 熊本大学・生命資源研究・支援センター・バイオ情報分野
出水 紀行	630-0192	奈良県生駒市高山町8916-5 奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科 原核生物分子遺伝学講座

上 船 晴 香	630-0192	奈良県生駒市高山町8916-5 奈良先端科学技術大学院大学・バイオサイエンス研究科・ 原核生物分子遺伝学研究室
棟 久 綾志郎	812-8581	福岡県福岡市東区箱崎6-10-1 (旧工学部3号館) 九州大学理学部生物学科進化遺伝学研究室
Hang Le Phuong	630-0192	奈良県生駒市高山町8916-5 奈良先端科学技術大学院大学・バイオサイエンス研究科・ 原核生物分子遺伝学研究室
Pey Jiun Lai	630-0192	奈良県生駒市高山町8916-5 奈良先端科学技術大学院大学・バイオサイエンス研究科・ 原核生物分子遺伝学研究室
村 本 伸 彦	480-1192	愛知県長久手市横道41番地の1 株式会社豊田中央研究所・バイオ研究室
白 井 一 正	812-8581	福岡市東区箱崎6-10-1 九州大学大学院・システム生命科学府・システム生命科学科・ 進化遺伝学研究室
岸 本 真 幸	700-8530	岡山市北区津島中三丁目1番1号 岡山大学大学院自然科学研究科生物科学専攻
薦 田 麻 衣		愛媛大学理工学研究科環境機能科学専攻
能 丸 寛 子	812-8582	福岡県福岡市東区馬出3-1-1 九州大学・生医研・脳機能学分野
岩 田 浩 明	812-8582	福岡県福岡市東区馬出3-1-1 九州大学生体防御医学研究所情報生物学分野
築 山 拓 司	606-8502	京都府京都市左京区北白川追分町 京都大学大学院農学研究科育種学研究室
Ng Wei Lun	812-8581	福岡県福岡市東区箱崎6-10-1 九州大学大学院・システム生命科学府・システム生命科学科・ 進化遺伝学研究室
榎 根 一 夫	444-8585	愛知県岡崎市明大寺町字西郷中38 基礎生物学研究所 多様性生物学研究室
HETTIARACHCHI NADEEKA NILMINI	411-8540	三島市谷田1111 国立遺伝学研究所内総合研究大学院大学 集団遺伝研究部門 斎藤研
藤 原 敏 弥	812-8582	福岡県福岡市東区馬出3-1-1 九州大学院システム生命科学府ゲノム機能学研究室
米 嶋 康 臣	812-8582	福岡市東区馬出3-1-1 九州大学生体防御医学研究所脳機能制御学分野
小早川 優 子	815-8582	福岡県福岡市東区馬出3-1-1 九州大学 生体防御医学研究所 脳機能制御学
関 貴 洋	338-8570	埼玉県さいたま市桜区下大久保255 埼玉大学大学院 理工学研究科 分子生物学コース 遺伝情報研究室
古 川 祐 吾		埼玉大学理工学研究科 生命科学科 分子生物学コース 遺伝情報研究室
西 野 有 紀		埼玉大学・理工学研究科・生命科学系専攻・分子生物学コース・ 遺伝情報研究室
東 出 望 花	565-0871	大阪府吹田市山田丘3番2号 蛋白質研究所7階 ゲノム-染色体機能研究室 大阪大学大学院理学研究科生物科学専攻 ゲノム-染色体機能研究室
河 野 宏 光	411-8540	静岡県三島市谷田1111 国立遺伝学研究所 哺乳動物遺伝研究室東京大学大学院・ 理学系研究科・生物化学専攻・太田研究室
末 次 正 幸	812-8582	福岡県福岡市東区馬出3-1-1 九州大学 薬学研究院 分子生物化学分野
伊 藤 将	153-8902	東京都目黒区駒場3-8-1 15号館309B室 東京大学大学院 総合文化研究科 広域科学専攻 生命環境科学系 太田研究室

ISLAM MOHAMMED MAFIZUL	739-8526	広島県東広島市鏡山1-3-1 広島大学大学院理学研究科附属両生類研究施設
林 亜 紀	650-0047	兵庫県神戸市中央区港島南町2-2-3 理研 CDB 6 階理化学研究所・発生・再生科学総合研究センター・ クロマチン動態チーム
瀧 口 友 香	812-8582	福岡市東区馬出3丁目1番1号 九州大学 生体防御医学研究所 脳機能制御学分野
三 澤 計 治	230-0045	横浜市鶴見区末広町1-7-22 理化学研究所横浜研究所 E206理化学研究所 次世代計算科学研究開発プログラム
首 浦 武作志	683-8503	鳥取県米子市西町86 鳥取大学大学院医学系研究科機能再生医科学専攻 生体機能医工学講座遺伝子機能工学部門細胞工学教室
秋 本 頼 子	812-8582	福岡県福岡市東区馬出3-1-1 九州大学 生体防御医学研究所 脳機能制御学分野
稲 垣 宗 一	411-8540	静岡県三島市谷田1111 国立遺伝学研究所 総合遺伝研究系 育種遺伝研究部門
Buzas Diana Mihaela	630-0192	奈良県生駒市高山町8916-5 奈良先端科学技術大学院大学グローバル COE 植物試食遺伝学研究グループ
鳥 居 侑 史	192-0397	東京都八王子市南大沢1-1 首都大学東京大学院・理工学研究科・生命科学専攻
鷗 木 元 香	812-8582	福岡県福岡市東区馬出3-1-1 九州大学・生体防御医学研究所・エピゲノム学分野
CASTILLO CARRION ERIKA KATHERINE	815-8582	福岡県福岡市東区馬出3-1-1 九州大学 生体防御医学研究所 脳機能制御学
Leon Julio	812-8582	福岡県福岡市東区馬出3-1-1 九州大学 生体防御医学研究所 脳機能制御学
Liu Huan-Zhen	790-8566	愛媛県松山市樽味3丁目5-7 愛媛大学農学部生物資源生産学専攻
岡 素雅子	812-8582	福岡県福岡市東区馬出3-1-1 九州大学 生体防御医学研究所 脳機能制御学分野
佐々木 江理子	240-0193	神奈川県三浦郡葉山町上山口1560-39 総合研究大学院大学先端科学研究科
伊 藤 佑	411-8540	静岡県三島市谷田1111 国立遺伝学研究所総合遺伝研究系育種遺伝研究部門角谷研究室
小田原 真 樹	606-8502	京都府京都市左京区北白川追分町 京都大学理学研究科生物科学専攻 植物分子遺伝学研究室
平 芳 一 法	606-8507	京都市左京区聖護院川原町53 京都大学・再生医科学研究所・細胞機能調節学
フォーセット ジェフリ	240-0193	神奈川県三浦郡葉山町湘南国際村 総合研究大学院大学・先端科学研究科
Du Peng	060-0814	札幌市北区北14条西9丁目 北海道大学大学院 情報科学研究科
岡 健太郎		東京大学大学院理学系研究科遺伝学研究室
家 入 雄 樹	812-8581	福岡県福岡市東区箱崎6-10-1 九州大学, システム生命科学府, システム生命科学専攻, 進化遺伝学研究室
鷗之沢 英 理	411-8540	静岡県三島市谷田1111 総合研究大学院大学・生命科学研究科・遺伝学専攻・小林研究室
盛 子 敬	812-8582	福岡県福岡市東区馬出3-1-1 九州大学・生体防御医学研究所・脳機能制御学分野 九州大学 ヌクレオチドプール研究センター
Buttiker Jacqueline	812-8581	福岡市東区箱崎6-10-1 九州大学大学院農学研究院 遺伝子資源工学部門
Eimes John	240-0193	神奈川県三浦郡葉山町上山口1560-35 総合研究大学院大学

安田俊平	156-8506	東京都世田谷区上北沢2-1-6 東京都医学総合研究所 哺乳類遺伝 PT
荻朋男	852-8523	長崎市坂本1-12-4長崎大学医学部 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科附属原爆後障害医療研究施設 原研分子
赤間勇介	812-8582	福岡県福岡市東区馬出3-1-1 九州大学院薬学府創薬科専攻分子生物薬学研究室
藤本明洋	230-0045	神奈川県横浜市鶴見区1-7-22 東研究棟2階 (E208) 理化学研究所・ゲノム医科学研究センター・ 情報解析研究チーム
榮岩春奈	411-8540	静岡県三島市谷田1111 総合研究大学院大学・生命科学研究科・遺伝学専攻・ 細胞遺伝研究部門
西原秀典	226-8501	横浜市緑区長津田町4259-B-21 東京工業大学

退 会

上島脩志, 宮嶋正康, 丹羽由実, 志波 優, 渡辺光一, 池永満生, 橋本哲男, 中村文哉, 月井雄二, 岡本有生, 湯川 泰, 杉 拓磨, 林美貴子, 木全 翼, Liimien, Yee, MD EMDADUL HAQUE, 鷺谷 昂, 山下正博, 横山講平, 長戸康郎, 太田博樹, 堀 幸雄, 井原正昭, 根岸友恵, Ismael, Khatab, 石島淳子, 近藤勝彦, 郭 始光, 小森加代子, 土井一行, 木村 澄, 中山浩次, 西村啓士郎, 坂本正弘, 梶川正樹, 野崎正美, 森下めぐみ, 松永英子, 村上佳奈, 大川安信, 太田大策, 山野井玲, 福井玲子, 孫田信一, 齋藤久美, 坂口周子, 佐々木剛, 広瀬 進, 今西 規, 谷口研至, 中村太郎, 土田雅士, 柳沢貴司, 大道佳晃, 山岸真澄, 村山泰斗, 名取陽祐, 山本章治, 寺久保洋, 古瀬民生, 山道真人, 井上喜博, 谷村 遊, フラドパオラ, 赤松 隆, 小倉(野田) 彰子, 佐藤明子, 吉田明希子, 畦岡 博, 尾崎省吾, 松本英樹, 蔡 劍平, 大久保玲子, 檀上稲穂, Ahmed Mohamed Mahmoud Ahmed, 後藤禎補, 猪子英俊, 武部 啓, 上田 均, 井野郁男, 石井健太郎, 津田勝利, 宮武和史, 沙魚川公子, 阿部清美, 近藤友貴, 今井早希, 陶 蕾蕾, 高橋正和, 岩崎まゆみ, 村上怜子, 武藤梨沙, 成瀬 清, 花鳥 功, 西尾奈々, 小椋 光, 高橋 卓, 木村亮介, 坂井貴臣, 安藤沙友里, 関 峰秋, 下和田智康, 鈴木智広, 立川 誠, 吉村 崇, 田辺秀之, 寺井洋平, 加藤宏明, 伊藤 亮, 片平絵美子, 南竜之介, 上野広樹, 杉山信一郎, 高祖崇好, 原 義令, 須永愛, 根岸武彦, 檜作洋平, 湯浅浩史, 内山貴子, 潮田嘉子, 尾崎真央, 久高洋介

日本遺伝学会会則

- 第1条 本会は日本遺伝学会と称する。
- 第2条 本会は遺伝に関する研究を奨め、その知識の普及を計ることを目的とする。
- 第3条 本会は事務所を静岡県三島市谷田、国立遺伝学研究所内におく。
- 第4条 本会に入会しようとするものは住所、氏名および職業を明記して本会事務所に申し込むこと。
- 第5条 本会会員は普通会員、機関会員、賛助会員および名誉会員とする。毎年普通会員は会費10,000円（ただし在学証明書またはそれに代わるものを提出したとき、あるいは定年退職して常勤職でなくなったことを申し出たときは6,000円）を、機関会員は15,000円を、賛助会員は1口（20,000円）以上を前納すること。会員で会費滞納1年におよぶものは資格を失うものとする。
- 第6条 本会は次の者を総会の決議により名誉会員にすることができる。
本会に功労のあった者、外国の卓越した遺伝学者。
- 第7条 本会は隔月1回遺伝学雑誌を発行して会員に配布する。
- 第8条 本会は毎年1回大会を開く。大会は総会と講演会とに分け、総会では会務の報告、規則の改正、役員選挙および他の議事を行い講演会では普通会員および名誉会員の研究発表をする。
大会に関する世話は大会委員若干名によって行い、大会委員長は会長が委嘱する。大会は臨時に開くことがある。
- 第9条 本会は各地に談話会をおくことができる。
- 第10条 本会は会長1名、幹事若干名、会計監査2名の役員、および評議員若干名をおく。
1) 会長は本会を代表し、会務を統轄する。
2) 会長は、評議員が全普通会員の中から選出した複数の候補者から普通会員による直接選挙によって選出される。
3) 評議員は、普通会員による直接選挙で選出される。
4) 幹事は、会長が推薦する候補会員を評議員の過半数が承認することにより選任される。
5) 会計監査は、会長が推薦する候補会員を評議員の過半数が承認することにより選任される。
6) 会長は評議員会を招集し、その議長を務める。幹事は評議員会に出席するものとする。
7) 評議員会は会員を代表して、事業計画、経費の収支、予算・決算、学会誌の発行、大会の開催、その他重要事項について審議し、出席評議員の過半数をもって議決する。
8) 会長ならびに幹事により幹事会を構成し、会長がこれを代表する。
9) 幹事会は、学会の関連事項を論議し評議員会に諮ると共に、会務を執行する。
10) 会計監査は、学会の会計を監査する。
- 第11条 役員および評議員の任期は2カ年とする。会長および評議員は連続三選はできない。
- 第12条 本会の事務年度は暦年による。
- 付則 平成7年10月13日に第5条を改正し、平成8年1月1日から施行する。
- 付則 平成21年9月17日に第5条を改正し、平成22年1月1日から施行する。

<p>Genes & Genetic Systems 第87巻4号（付録） 2012年11月15日発行 非売品 発行者 五條堀 孝 印刷所 レタープレス株式会社 Letterpress Co., Ltd. Japan 〒739-1752 広島市安佐北区上深川町809-5番地 電話 082 (844) 7500 FAX 082 (844) 7800</p> <hr/> <p>発行所 日本遺伝学会 Genetics Society of Japan 静岡県三島市谷田1111 国立遺伝学研究所内</p>	<p>学会事務取扱 〒411-8540 静岡県三島市谷田・国立遺伝学研究所内 日本遺伝学会 http://www.soc.nii.ac.jp/gsj3/index.html (電話・FAX 055-981-6736 振替口座・00110-7-183404 加入者名・日本遺伝学会)</p> <hr/> <p>国内庶務、渉外庶務、会計、企画・集會、将来計画、編集などに関する事務上のお問い合わせは、各担当幹事あてご連絡下さい。 乱丁、落丁はお取替えます。</p>
--	---

